科学と文芸：イェイル・レポートを分かつもの
Science and Literature: What Divides the Yale Report

立川　明 TACHIKAWA, Akira
● 国際基督教大学
International Christian University

Keywords イェイル・レポート，オックスフォード，『エディンバラ・レヴュー』，カント，古典語
Yale Report, Oxford, the Edinburgh Review, Kant, Ancient Languages

ABSTRACT

The present essay distinguishes, unlike a standard interpretation, the first two parts of the Yale Report as two entities which develop somewhat distintive arguments. In order to substantiate this thesis, the author will compare the second part written by James Kingsley with the controversies over classics education between the Edinburgh Review and Oxford around 1810, and the first part written by Jeremiah Day, with Kant's discussion on the conflict of the faculties around the end of the eighteenth century. The comparisons will reveal that Day insists on the superiority of collegiate education over professional as well as advanced vocational training by emphasizing the central place which the principles of science occupy in the collegiate curriculum. Also clarified will be the point that Kingsley's argument for classics education, despite the cherished theory of mental discipline, proves purely defensive like the case of Oxford against the Edinburgh Review.

はじめに

先の拙論でも指摘したように，アメリカ的カレジ制度の独立宣言として 1828 年に書き上げられたイェイル・レポートは，同カレジの卒業生で理事でもあったノイエス・ダーリングによるカレジ改革に向けた問題提起を直接のきっかけとして成立した[注1]．問題提起の主旨は，同レポートでも何度か言及されているように，「当カレジでの通常の教育課程を変更して，当該の課程から死言語を除去して他の学習に替えることの適否について，また当カレジへの入学の一条件としてこれら死言語の十分な知識を要求すべきか，はたまたこれら言語の訓練については入学の後に学習を選択する者たちに限り提供すべきか，について検討する」ことであった．[91][1] すなわちダーリングは，ギリシア語・ラテン語を，必修科目としてはカレジの教育課程から排除し，こうした古典語に替えて他の学習を導入する可能性を検討するようカレジに迫ったのである．「他の学習」が応用科学を含む「実用的な」学習を意味していたであろう点は，一つには同レポート自身が，カレジ教育での「諸原理の応用」の重要さを強調し，また新興生産階級がその富を国家に「有益となる仕方で用いる」よう導く上で，カレジが果たす役割に言及していることから伺うことができる．[28][55] また一方 1820 年代は，古典語中心の伝統的な教育課程に加え，近代諸言語と有用な科学とを中心とする平行課程が導入された時代である．フレデリック・ルードルフによれば，古典語をはずして近代諸言語や科学で代替する教育課程は，18 世紀のプリンストン等で出現したが，1820 年代には「一つの運動」にまで発展したという．アムハースト・カレジやユニオン・カレジといったイェイルの好敵手も，この時期に平行課程を導入し，特にユニオンはやがて工学，鉄道建設学，鉱山学等を学ぶ学生を含めて，卒業生数でイェイルを凌ぐにいたる[注2]．他のカレジにおける平行課程については，イェイル・レポート自身の中にも言及が見られる．[80]

同レポートは，古典語を排除して他の学習に替える必要性を認めないか，との上記のような提起に対する，カレジの教授団側からの全面的な反論となっている．以下に掲載する第二部，第三部の翻訳で，イェイル・レポートの全貌が尽されることとなる．ところで，三部の全体，中でも学長ジェレマイア・デイの起草した第一部と，古典語の教授ジェイムズ・キングスレイの手になる第二部とを比較すると，同レポートは一貫した主張を展開しつつも，微妙だが，しかし重要な相違を孕んでいたことが知られる．ここでは当面，デイが数学者であるとともに，実験的な科学者であったのにたいし，キングスレイの専門がヘブライ語，ギリシア語，ラテン語という古典語そのものであった，という事実のみを指摘して，その微妙な違いの内容を示唆するに止める．本論では，次のような手続きに従って全三部を較べながら，イェイル・レポートの全体像を提示しようとする．三部は，それぞれの内容を分析することで較べることもできるが，しかし何分にも古い文書でもあり，単純な語句や主張の分析では，正確な全体像を把握できない虞れがある．そこで以下では多少とも当時の歴史の文脈との関連で，イェイル・レポートの第一部，第二部の主張の特色を分析する．ここでの歴史的な文脈とは，アメリカ合衆国での歴史との関連ではなく，18 世紀末から 19 世紀初頭のヨーロッパでの大学論をさす．すなわち，同レポートの第二部は，19 世紀の初頭，1808 年から 1810 年にかけて，『エディンバラ・レヴュー』誌とオックスフォード大学との間に展開された大学教育論争との類似・相違に注目して，分析する．同じく第一部については，18 世紀の末，イマニュエル・カントが定式化した『学部の争い』との類似・相違を検討する中で，その特徴を抽出する．そうした考察を経た上で，第三部の検討を含めて，イェイル・レポートの全体像の解釈に迫りたい．

イェイル・レポートの前史 I：『エディンバラ・レヴュー』誌対オックスフォード大学

イェイル・レポートの成立事情を念頭に置きつつ，ヨーロッパの大学史を瞥見すると，その前史と看做しうる類似の出来事のあったことに気づく．

ウィスコンシン大学のユルゲン・ヘルプストは，1996 年に出版した『学校の過去と未来』の中で，19 世紀初頭，スコットランドの『エディンバラ・レヴュー』誌とオックスフォード大学との間に展開された論争が，イェイル・レポートの前史として注目に値することを指摘した[注3]．論争の口火を切ったのは，『エディンバラ・レヴュー』誌の 1808 年 1 月号である．この号はラプラスの『天体力学論』を評する論文を掲載したが，その評者は結論近くにおいて，大陸に比べ高度な数学や科学研究面での遅れの目立つイングランドの現状を悲嘆し，そうした事態をもたらした最大の責任は，古典を偏重し科学を軽視するオックスフォード大学での教育研究にあると指摘した．評者によれば，オックスフォードでは，アリストテレスの指令がいぜんとして「絶対確実な判決として傾聴され，科学の未発達がその成熟と誤解され，数理科学が花開いたことは絶えてない」というのである[注4]．しかし，『エディンバラ・レヴュー』は，オックスフォードは古典研究面での貢献だけについては信頼できると断定した訳でもない．翌年の 7 月号は，オックスフォードから公刊されたストラボンの新訂版『地理学』への批評を掲載したが，評者は校訂者の古典語の無知を強調してその仕事ぶりを酷評し，名誉ある大学は「真に優れた才能と健全な学識を備えた者にのみ」仕事を委託すべし，とオックスフォードには屈辱的な忠告をつきつけたのである[注5]．『エディンバラ・レヴュー』誌は，ギリシア語・ラテン語の教育上の意義，特に時制を中心とするギリシア語の文法上の訓練の意義については，むしろ肯定的であった．しかし，幼年から 20 歳台の前半まで，文字どおり古典語教育に専念させる方法には懐疑的であった．自立的な探究の能力を欠いた若者たちは，学校では秀才であっても，「現実世界では無に等しい」と同誌には映った．オックスフォードは今後，古典語のみではなく，化学，数学さらに実験科学にも等しく力を入れるべきである．更には，貧困，生産，法の問題等を教え，社会に有用な人材を教え育てなくてはならない，と厳しい注文を課したのである[注6]．

『エディンバラ・レヴュー』によるオックスフォード教育の批判・批難にたいして，大学を擁護したのはオリオル・カレジのエドワード・コプルストンであった．彼の同僚ジョン・デイヴィソンも，いくつかの論文を著しコプルストンを援護した[注7]．しかし，主役は何といってもコプルストンであり，彼は 1810 年から翌年にかけて 3 部からなるパンフレット（合計339ページ）を出版して，体系的な反論を試みたのである[注8]．一連の『エディンバラ・レヴュー』誌上の評論によるオックスフォード批判がすでに包括的だったことを反映し，コプルストンによる反論も多岐に亘った．まず第一は，アリストテレスがオックスフォードで占める位置と，アリストテレスの論理学の特質に関わる反論である．批判者たちは，オックスフォードではアリストテレスの「科学」が主流であると主張するが，しかしコプルストンによればこれは事実誤認である．フランシス・ベーコンやニュートンの出現以来，大学でのアリストテレスの地位は眼に見えて後退し，過去の一世紀以上にわたり，彼の『自然学』が「自然科学」として参照されたことはない．けれども，時代遅れのアリストテレス，特にその『論理学』がいぜん用いられているのも事実である．その理由は，近代科学を基準にとり，ベーコンを新として，アリストテレスを旧と位置づけて事足れりとするほど，事柄は単純ではないからである．まず一般的には，アリストテレスの論理学には，真理を求めるオープンな彼の姿勢が色濃く反映している[注9]．加えて，俗説ではベーコンが初めて導入したとされる帰納法を，アリストテレスは実は十分に知っており，ベーコンとの類似はむしろ著しかったのである．両者の違いは，アリストテレスが結論を出すのに不十分な証拠に基づき性急であったのに較べ，ベーコンが説得力のある仕方で注意深く事を運んだという点にこそ求められる，とコプルストンは主張する[注10]．それのみではない．批判者たちはまず近代科学を前提として，ベーコンとアリストテレスの優劣を論じているが，そもそも後者の論理学は科学のために存在するわけではない．アリストテレスは，自らの論理学を用い，生きた素材を駆使しつつ，自らの諸建築物を構築している哲学者なのである[注11]．

ストラボンに関する論争は，当時のオックスフォードのラテン語が，古代ローマのラテン語からいかほどに逸脱していたかをめぐる専門的なもので，正しく沽券を賭けた争いであったようである．事実，コプルストンはこの議論に約 70 ページものスペースを費やしている．しかし，当時のギリシア語・ラテン語の水準という，筆者の判断能力を全く超えた論争であり，かつ大学の教育方針とは直接関わってはいないように見受けられるので，ここではその分析を省略せざるをえない[注12]．オックスフォードは社会に有用な人材を育てるような教育を実施していない，との『エディンバラ・レヴュー』の批判にたいしては，コプルストンはまず「有用」についての二つの観点を区別する．すなわち，一人ひとりの個人の安寧からする有用と，社会の立場からする有用とである．彼によれば，『エディンバラ・レヴュー』が主張する有用では，後者の観点が圧倒的に強い．有力な具体例は，アダム・スミスの分業論である．国民の富が唯一の目的なら，生産における分業の有効性を肯定的に評価することはやぶさかでない，とコプルストンはいう．けれども，社会に役立つことと，個々人に役に立つこととは違う．分業では個々の人間の能力の一部のみを多用することで人の多くを片輪化し，社会的な問題をつくる結果となる．人間は，個々が有する多様な能力をバランスよく鍛えてこそ，解放される．社会の調和も実現する．そのためには，分業への対抗力・矯正力を教育面で動員することである．その最も有効な方法は，人々の間に共通な関心を涵養してゆくことであり，文学と古典を用いた教育を置いてない．古典教育の目的は，学生を特定の専門職へと導くためでない．むしろ，どのような職業にも，優雅さと余裕に満ちた姿勢とを付与するためである．これこそオックスフォードでの教育が目指すものなのである[注13]．

では何故に他の科目ではなくて，ギリシア・ローマの古典を用いた教育なのか．コプルストンによれば，それは何よりもそうした古典が，人間精神の生み出した選り抜きの成果を代表するからである．しかも，それらの神髄の理解には翻訳は全く不十分で，原語を用いねばならない．何故ならば，伝達手段として，伝達内容とは容易に二分されうる近代諸言語とは違い，例えばギリシア語の言葉は含蓄に富み，作者と内容とに区切りを設けにくいからである[注14]．しかし，こうした古典の教育がオックスフォードでの訓練の全てではない．厳密な論理学や数学の諸公理はどのカレジでも教えている．加えて，実験哲学，化学，植物学等の講義が，大学構成員の誰にたいしても公開されている．科学の発展に対応する一方で，人間と社会とについての古代の知恵を，じっくりと涵養するのがオックスフォードの教育である，とコプルストンは主張するのである[注15]．

更にコプルストンは，何度も繰り返えされる厳格な試験を例示して，オックスフォードでの訓練がいかに徹底的であるかを示すと共に，教員たちの活動が，研究とは対比された意味の教育にいかに集中されているかを説明した[注16]．彼によれば大学の使命は，未知の事柄の発見ではなく，あくまで「完璧に合意されている内容を教授し，推奨すること」なのである[注17]．この表現は，ベルリン大学の創設に尽力したヴィルヘルム・フォン・フンボルトが同じ 1810 年に定式化した，ギムナジウムを含む学校と大学での勉学様式の区別の内，ギムナジウムでの勉学の定義に対応することは，容易に見て取れる．すなわちフンボルトは，未解決問題を探究する大学との対比において，ギムナジウムを含む学校では「仕上げられ決着のつけられた知識のみを取り扱う」と論じた[注18]．この定式に従えば，上記のコプルストンも，イェイルのジェレマイア・デイも共に，大西洋を挟んだ両カレジでの教育を，大学のそれではなく，ギムナジウムの教育にあたる，と宣言したことになる．すなわち，デイの方は，学業水準と学生の年齢の点で「合衆国の諸カレジに最も近似するドイツの機関はギムナジウムなのである」と明言しているのである．[38] 加えてコプルストンの著述には，後のイェイル・レポートを彷彿とさせる表現が散見する．例えば以前の論述で筆者は，イェイル・レポートの第一部が，カレジ教育の目的を「優れた教育への基礎を築く」to LAY THE FOUNDATION of a SUPERIOR EDUCATION ことと定式化した点に

注目した[注19]．[7] 他方コプルストンは，オックスフォードの教育の中心的な仕事は，生徒の関心が具体的な仕事に集中してしまう前に「自由な文学の基礎を築くこと」to lay a foundation of liberal literature であると述べたのである[注20]．

以上から判断して，オックスフォード対『エディンバラ・レヴュー』誌の論争が，ヘルプストの主張するごとく，イェイル・レポートの前史の一つであったことは疑えないであろう．ところでヘルプストは，両者の類似点に加えて，その相違点にも着目している．イェイル・レポートが新しい共和国でのカレジ教育の役割を力強く打ち出したのとは対照的に，コプルストンの反論の方は完全に防衛的な (purely defensive) 態度に終始した，というのである．この違いはどこから出てくるのだろうか．ヘルプストによれば，イェイル・レポートは能力心理学に基礎づけてカレジ教育の独自の機能を提唱したのにたいし，コプルストンはそうした視点を欠いた点である．その結果，イェイル・レポートはカレジ教育の汎用性を堂々と展開できた一方で，コプルストンは古典教育の伝統を縷々述べるのが精一杯であった．

しかし，イェイル・レポートとコプルストンのオックスフォード論との相違に着目すると，両者については他にも対比しうる側面があることに気づく．また，レポート自体の構成が一貫性を欠く点にも注目せざるをえなくなる．まず，前者についてみよう．オックスフォード対『エディンバラ・レヴュー』誌と，イェイル・レポートとでは，いわばキャストの配置が一部正反対である．オックスフォード対『エディンバラ・レヴュー』誌では，大学を批判したのは科学に強い側だったといえる．批判者の一人ジョン・プレイフェアはスコットランドを代表する科学者であったのにたいし，オックスフォード大学を擁護したコプルストンは，前出のように論理学の著作をものにしたとはいえ，正式には詩学の教授であった[注21]．両者のこうした立場を象徴するかのように，1810 年 4 月，コプルストンの反批判を更に論難したプレイフェアたちは，エディンバラがオックスフォードの古典学には対抗できないことを認めるから，オックスフォードはエディンバラの科学と哲学にはかなわないことを承認すべきだ，と迫ったのである[注22]．科学者による人文学者の批判が，『エディンバラ・レヴュー』誌の基調であったといっても過言ではない．これとは対照的に，イェイル・カレジを批判した同窓生ダーリングは法律家であって，特に科学の背景を備えていたわけではない．他方，これを受けて立ったイェイル側の代表である学長ジェレマイア・デイは，数学および自然哲学の教授であって，その方面での著作も公表していたのである[注23]．

論争の当事者の背景に見られるこうした対照に着目すると，更にもう一つイェイル・レポートの特色に気づく．本論に続く翻訳にも明らかなように，本レポートは三部から構成されている．このうち第三部は，法人の特命委員会による第一部，第二部の要約と言う色彩が強い．したがって，本体は第一部（『教育研究』43号に翻訳公表済み）と第二部（本号を参照）とからなる．このうち前者の著者は学長で数学者・科学者であったジェレマイア・デイである．これとは対照的に，第二部の執筆者キングスレイはヘブライ語・ギリシア語・ラテン語の教授である．オックスフォードのコプルストンに近い背景の持ち主である．実際，こうした背景を一部分は反映してであろう，イェイル・レポートの第一部と第二部とでは，その論旨や強調がかなり相違している．第一部ではカレジ教育の目的は，科学と文芸の諸原理を徹底的に学ばせる点にあるとしているが，その強調点はむしろ科学の諸原理にある．その理由は一部分は，キングスレイとの分業を意識していることの結果であろう．[31] しかし他方，デイは様々な職業への準備における科学の諸原理の有用性を強調しているし[25][31]，またカレジでの上級生の組分けもそうした諸原理の理解の程度に合わせて行うとしている．[33] 更にデイは，アメリカのカレジとドイツのギムナジウムの教育レヴェルを比較するにあたって，文芸方面では後者に軍配を上げているにもかかわらず，科学教育の水準については判断を逆転させているのである．[38]

したがって，イェイル・レポートを評価したり他のレポートと比較する場合には，着目するのが

同レポートの第一部であるか，第二部であるかによって，判定の結果や比較の意義が多少とも変化しうる．キングスレイの著述した第二部は，イェイル・レポートの本来の主題であるはずの古典教育の意義の有無を検討している．ここでの議論にはあまり新鮮味が感じられない．ヘルプストがコプルストンのオックスフォード教育の擁護論に見い出したのと同じ消極的な議論だったのである[注24]．他方，デイの草した第一部に注目すると，その比較対象がコプルストンに尽きないことが知られる．デイは主として，カレジ教育と高度な職業教育とを対比している．両者の役割は補完的であり重なるべきでない，という前提に立って議論しているのである[注25]．その上でデイは，「科学の諸原理の徹底した基礎を置く」カレジの教育が，本来は後に来るべき専門職向けの訓練にも不可欠だと論じる．その理由はいくつかあるが，中でも実践的な経験・知見との対比における，科学の諸原理の優越への確信が目立つ．「科学の諸原理には，単なる一職人には思いもよらないような生産力がある．」[27] デイは職業訓練の短期実践的な効用と比較しつつ，カレジ教育の長期的・普遍的な効用の優位を主張しているのである．

イェイル・レポート前史 II：カントの「諸学部の争い」とデイの基礎教育論

論争当事者間に見られるこうした対比が連想させるのは，古典教育か科学教育か，アリストテレスかフランシス・ベーコンか，といったオックスフォード対『エディンバラ・レヴュー』誌の対決ではない．むしろ，いささか突飛ではあるが，18世紀の末，哲学者イマヌエル・カントが哲学部と他の上級学部との対立として描いた大学論である．そこではカントは，政府からの信任を受けて，政府に有益な教育・研究活動を展開する神・法・医の三上級学部が，政府と社会一般の眼からはいかにも有用に見えることを述べる．対照的に政府との実務上の信任を何ら有さない哲学部には無用の観があり，政府はこれを学者の理性に委ねる．というのも，本来国家は国民の魂，社会生活の安定，健康に配慮せねばならず，このそれぞれに関して上級学部は専門の立場から指針を与える．哲学部ができることといえばせいぜい，当面は理性から引き出せるのは，国民それぞれが自立的に対応すべきである，と答えることに過ぎない．しかし，国民の魂，社会生活の安定，健康への期待は，いずれも自立的な対応の必要を無視し，いわば不合理な願望に至りやすい．（悪事を尽して魂だけは救われたい，掛け金は一銭も払わずに年金だけはもらいたい，喫煙と暴飲の限りを尽しながら健康を一挙に回復したい，等々．）こうした期待が大学に向けられた場合，専門諸学部がこうした願望を奇跡的に実現するような素振りを見せれば，哲学部は当然にも諸学部に闘いを挑むことになる．しかし，いまやアナーキーに陥りつつある国民，政府，上級学部の全てを敵に回した闘いに勝ち目はなく，闘いを挑んだ哲学部は死滅を迎えることになろう[注26]．したがって，上級学部が国民の真に合理的な期待にのみ責任をもって対応するよう導くには，政府は上級学部の特定の立場が理性の観点からみて支持されるものか否か，に常に注意を払っていなけらばならない．この為には政府は，そうした役目を引き受けるに相応しい哲学部が，理性の観点から，上級学部を常に検証することを許すべきである．合法的な対立を許すべきなのである．その結果，上級学部の権威，ひいては政府の権威も，高まることになる．このような意味で，今は下級学部と呼ばれる哲学部が，第一の学部と成る日が到来するであろう，とカントは期待するのである[注27]．

デイが第一部で描くカレジは，上級諸学部の教育研究を理性の観点から検証する機関ではない．19世紀初頭のアメリカ合衆国のカレジにおいては，ドイツにおけるような下級学部と上級学部の関係は存在していない．現にデイは第一部において，財政上の理由から，そうしたドイツ大学の模倣を拒絶している．[38] けれども，イェイル・レポートの前後の期間には，一方のカレジ学生と，他方の神学生，法学生，医学生とについて，イェイルの学生構成に大きな変化のあったのも事実である．レポート前後のカレジ要覧によれば，1817 年，

1827年，1837年の種類別の在学者数は以下のようである[注28]．

	1817	1827	1837
レジ学生数	262	335	411
卒後在学生	21	5	−
神学生	−	20	32
法学生	−	20	32
医学生	−	91	46

1810年代までは，イェイルはカレジ卒業生にたいし，非公式に専門職向けの訓練を施していた．しかし，1810年代，20年代には医学校と神学校がそれぞれ開設されると共に，地域の法学校の学生もイェイルに在籍登録されるに至る[注29]．レポートに先立つ数年の間，学生の構成に関する限りイェイルが急激にドイツ大学に類似して来た点は指摘できる．この結果イェイルのカレジは，以前に比較すれば，カントの描く哲学部に似た立場を強く意識するようになった，といってよいであろう．神学，医学，法学のような専門職業向けの訓練の有用性は明らかである．こうした実用的な訓練の前では，カレジの教育は相対的には無用と映る．現にデイは第一部において，カレジでは化学や円錐曲線論，天文学といった，将来の専門職と関係のない科目を何故に教えるのか，と巷で呟かれる疑問に回答しようとしている[23]．彼の回答の論点は，どの方面の実践であれ，それを大規模かつ発展的に運営してゆくには，理論的な基礎が不可欠であるという点に尽きる．言い換えれば，単なる実践の積み上げから形成される専門職，生産活動の経験則には，大きな期待は抱くべくもないこと，唯一絶大な信頼に値する実践活動は，カレジの教育の中核をなす文芸と科学，なかんずく科学の諸原理の徹底的な訓練に基礎を置かねばならないことを，主張しているのである．合衆国には「心もとなく，虚弱で，育ち損ないのポプラの樹木が満ちあふれている.」教育を受けた者も少なく，自然なままで資源の豊かな合衆国には，「不完全で皮相的な教育課程で満足してしまうよう誘導するような，特異な誘惑」[51] が強い．科学と文芸の諸原理を徹底的に学ばないまま，大部分の国民の平凡な学問で足れりとする風潮に乗じて，医療や建設事業等を展開する者たちは，そうしたポプラの一部であろう．歴史や古典語のしっかりした基礎を欠く法律家や牧師たちも同様である．カント流に言えば，「非合法な闘い」を誘発して，国がアナーキーに陥る危険があるのである．デイにとっては，商業，機械工業，農業を含めたそれぞれの職業に従事する者たちが，「科学と文芸の諸原理」をカレジにおいて徹底的に学ぶことが不可欠である．カレジでの「高度で堅固な学識」の獲得が，合衆国の豊かな資源を元手に生み出される財産を死蔵させたり「無意味な贅沢に散財するすること」（＝アナーキー）なく，「自己にとっては最高の名誉となり，国家にとっては最高の利益」（＝永続的な発展）となる仕方で用いることを可能にするのであれば[55]，カレジの教育はアナーキーと安定した発展とを分かつ，決定的な転轍手の役割を負っている．そうした教育を受けて始めて，「大地にしっかりと根を張り，大空に向かってゆっくりと伸び，人々には有り難い枝葉を大きく広げ，年を重ねるごとに威厳も増し加わる堂々たるニレ」[51] が確保でき，合衆国の物質的および政治的な地盤は堅固なものとなるのである．

ヘルプストは，イェイル・レポートとオックスフォード対『エディンバラ・レヴュー』誌とを比較することによって，前者における能力心理学の活用に着目した．古典的なカリキュラムを同じく擁護しながら，オックスフォードが消極的な自己防衛に終始し，イェイルがカレジ教育の積極的な意義を力強く提唱しえた理由の一つは，後者が能力心理学の枠組みを最大限に利用した点にあるというのである[注30]．これにたいして，同レポートとカントの『学部の争い』との類似点に注目すると，目立つのは同レポートでの第一部と第二部の間の一貫性の欠如であり，ある意味では第一部の内部にすら見られる齟齬，すなわちデイに顕著な問題のずらしである．第一部でのデイは，数学・自然哲学の教授に相応しく，カレジ教育の価値は科学の諸原理の徹底的な教育にあるとの主張を基調としているのに対し，第二部でのキングスレイは科学の諸原理にはほとんど言及せず，もっぱらヨーロッパの文化と諸言語との中で，古典と古典語の

占める特権的な位置のみを根拠に，古典語の存続を擁護しようとしている．言い換えれば，デイはダーリングの問いには，設問を大きくずらすことにより，実質的には見事に回答しており，一方キングスレイの方は，同じ問いにかなり正面きって立ち向かいながら，納得のゆく回答は何ら備えていないのである．したがって，全体としてのイェイル・レポートは，ダーリングが突き付けた問いには，正面きっては能力心理学を駆使して回答したかのごとき体裁を繕い，この限り後の時代からは笑いものと看做されている．しかし，その実質的な回答は，研究者が常套的に引用する「精神と陶冶と装備」というレポート冒頭個所からは，多少ともずれた所に求められる[注31]．しかも，ずれたデイの回答は，議論の為の議論，言葉の遊びとはほど遠く，1820 年代のカレジ教育の現実を如実に反映していたのである．

大学史家の間では，アメリカ合衆国の初期のカレジは，ルネッサンス以来のカレジの学識を一貫して受け継ぎ，発展させたというのが定説となっている[注32]．けれども，ペトラルカを先駆者とするルネッサンスでは，自然からは独立した人間への関心が高まり，その結果カリキュラム上では人文学の範囲が劇的に狭まって，文法，修辞学，歴史，詩学，道徳哲学のような人間を学ぶものに 限定されたという[注33]．これとは対照的に，独立革命以降，特に 1820 年代のアメリカ合衆国の諸カレジでは，自然科学が大きな比重を占め始め，伝統的な人文学とは一線を画するようになった．ヨーロッパ大陸のように大学が科学研究の中核を担うことは当面ないとしても，南北戦争に至るまでのアメリカ合衆国では，諸カレジが「国の科学に貴重な住処と温床とを提供することになるのである．」[注34] しかもこうした諸カレジの中で，イェイルは科学教育おいて一頭他に抜きん出ていた．ギュラルニックによれば，1800 年には各カレジあたり平均 1 名，1830 年には平均 2 名の科学担当の教授が任用されていたというが，1826 年のイェイルには，医学が専門の 3 名の教授を除いても，デイ，シリマン，オルムステッド，ノイエスの 4 名の科学担当の教授・助教授が就任していた[注35]．加えて，イェイルは確かに科学の諸原理の教育へ特に力を入れていたようである．レポートの直前の 1826 年に入学し，直後の 1830 年に卒業した同窓生が記念誌を残しているが，その中で彼らは，他の講義には言及していないにもかかわらず，自然哲学と化学，地質学の講義の特色を比較的詳細に回顧しているからである[注36]．

デイの著した第一部の本体に注目すれば，17 世紀以来の科学革命とそれがもたらした原理的な知識へのさめた，しかし自信にあふれた確信が伺える．ドイツの哲学部もアメリカ合衆国のカレジも，それ以前に増して，自分に固有な力と存在理由とを主張する必要と基盤とを得た点は否定できない．カントは科学研究と批判哲学とを基礎にした哲学部の，上級学部にたいする優越を宣言し，デイは「科学と文芸の諸原理」を徹底して教えるカレジ教育こそが職業教育に真の威力と威厳とを付与しうると宣言した．しかし，アメリカ合衆国のカレジに限れば，こうした宣言は当然にも，単なる伝統としての古典語・古典文学の立場を弱めこそすれ，強めはしなかったはずである．われわれの仕事はしたがって，キングスレイがイェイル・レポート第二部において，科学の諸原理とは対比された位置におかれた古典カリキュラムをいかに擁護しようとしたのか，を検討することである．

キングスレイの古典教育擁護論：孤塁としての古典語

古典語教授のキングスレイは確かに，第二部の冒頭ではレポートの本来の課題をある程度は正確に表現している．彼はその主題を，「イェイル・カレジで行われている教育課程が，果たして文芸と科学の現状にたいし十分に順応しているか否か」[60] である，と捉えている．但し，死言語への言及が全くないことは注意すべきである．しかもキングスレイは，当時の古典語教育の実情の分析に直ちに進むことをせず，まず古くから教養の一分野と看做されていた数学が，当時の教育機関で高い位置を占めていた事実を取り上げる．その事実から，同様に旧い古典をまず擁護しようとするの

である．この論じ方には，古典教育の問題を科学・数学へとシフトしたデイ流のカレジ教育擁護論が影を落としている．キングスレイによれば，実践的な教育を目指した当時の諸機関は，数学に顕著な地位を与えたという．これは何故だろうか．キングスレイは二つの理由を挙げる．その根本理由は，知性を研ぎすますという数学の機能だという．能力心理学を前提とする議論である．キングスレイは第二に，数学が「実践的な諸科学の基礎に位置する」ことを指摘するのである[61]．しかし，この二つの理由の順序について，当時の諸機関のどれだけが無条件に賛意を表したであろうか．例えば，1824 年に開学したジェファーソンのヴァージニア大学では，軍事工学と土木工学とが数学科に付設される計画であった[注37]．数学が工学の基礎として意識されていることは明らかである．

仮に多くの教育機関が二つの理由を容認した場合でも，キングスレイの挙げた順序は恐らく逆転し，「実践的な諸科学の基礎に位置する」との理由の方が第一に来ることは十分に考えられる[注38]．確かに，自然哲学・数学者であったジェレマイア・デイも数学の目的は，税理士や航海士，測量士の基礎知識には尽きない，そうした目的に必要な数学の知識は初歩の初歩であって，教養教育を受ける者にとり，数学の目的は数学の論理を中心として，高い質の内容であると主張している[注39]．この主張に関しては，デイとキングスレイとの歩調は合っている．しかし，デイが具体例に「税理士や航海士，測量士」をわざわざ挙げたことからも推論できるように，イェイル・レポートの時代，例えば機械の製作に応用する力学の教育の整備は大学等においてもすでに進められており，そうした分野では数学の初歩では済まないことをデイも知っていたはずである．というのも，こうした力学の著作は，まさしく「実践的な技能を科学的な知識に基礎づける」[25] ものだったからである[注40]．言い換えるとキングスレイは，実用的な教育諸機関において数学が尊重されている事実から，古典語の安泰を類推で主張しようととする．数学の場合と「同様の根拠で，教養教育における古典文学の効用および必要性」[64] を擁護できるというのが，彼の論である．しかし，この論は簡単には成り立たない．それどころか，キングスレイの試みは十分に裏目にでうるものである．何故なら，数学と，古典語とが重要視される理由は，正反対でありえたからである．

古典の運命を類推させる事実は，古代の建築と彫刻とにも見い出せる，とキングスレイはいう．建築や彫刻は通常，時間という力の洗礼を受けてその欠陥を露呈し，時代遅れとなってゆく．しかし，ギリシアの建築と彫刻とは，時間の試練を経てなお欠陥を露呈しないのみか，現代の建築家や彫刻家のモデルとさえなっている．[66] 建築や彫刻と同じような事情が，古典文学についてあったとしても，不思議ではないとキングスレイはいう．古典文学には，数学や彫刻と共通な，時代の試練を超えた不朽の「優越性」が見い出されるというのである．[67] 確かにキングスレイの類推論には，人を納得させる一面があるが，しかし建築や彫刻と，文学とは明らかに異なったジャンルに属する．その上，前者は形象という，言葉の介在を必要としない力を通して人に訴えかけることができる．他方，古典文学の理解には，原語たるギリシア語・ラテン語と，古典古代の文化背景に関する最低限の知識とが不可欠である．とても同日に論じることはできない．

当然のことに，キングスレイは数学や建築・彫刻の場合とは明瞭に区別される古典語・古典文学に独自な教育上の意義を論じざるをえない．どのように論じるのであろうか．それを検討するにあたって，イェイル・レポートに先立つ時期のヨーロッパにおける人文主義の特質を要約しておきたい．ロバート・プロクターによれば，近代の人文主義では，ペトラルカとエラスムスを主役とする第一次人文主義と，ヘルダー，ゲーテおよびヴィルヘルム・フンボルトを中心とする第二次人文主義とが突出している．このうち前者は，古代ローマへの関心が顕著だったのに対し，第二次の方は古代ギリシアへ関心を集中させた．第二次のギリシアびいきの理由は，(1)ギリシア人たちが人間の諸能力の調和ある発達を目指したこと，および(2)手を汚す仕事から距離をとって人間の究極的な完

成を目指した点にあるという[注41].

二つの人文主義の時代を分かつもう一つ重要な違いがある．それは 16 世紀の末までには，西洋古典の近代語訳がすすみ，その多くがイタリア語，フランス語，ないし英語でも読めるようになっていたことである[注42]．イェイル・カレジに向けられた問いが，少なくとも文言上は，（古典文学ではなく）古典語（死言語）の教育の可否を問題としていた点からして，この事実は重要である．

ではキングスレイは，まず古典文学をどのように弁護するのか．ここでの彼の第一番目の論法は，ただ事実を提示するやり方である．ヨーロッパのいかなる国を見ても，教養教育においてギリシア・ローマの古典が不可欠でない国はない．アメリカ合衆国のカレジも，学生を教養人の世界に向けて送りだすつもりであれば，古典文学を重視する他はないというのである．[64] 次いで，キングスレイは，こうした古典がもつ基準の設定の力を挙げる．古代ギリシア・ローマの文学は「人間であれば備えているべき最高のもの」を知らしめる卓越性をに満ちているのである．人が文芸が代表する文化を評価する際の，決定的な基準を提供するというのである [65] これはコプルストンが 1810 年に主張した点である[注43]．キングスレイは第三番目には，人間の能力の訓練すなわち教育の観点から，古典文学の独自性を指摘する．人間の精神的な諸能力を，他の手段では不可能な形で訓練し，引き出すというのである．しかも古典は，子どもから熟年の者にまでの発達段階に応じ，それぞれ最上の訓練を可能にする素材を備えている．加えて，具体的に訓練する諸能力は，記憶力から，判断力や思考力等の広範な能力に及ぶというのである．[68] キングスレイの擁護論は，第二次人文主義の「人間の諸能力の調和ある発達」の要素も含みながら，他方デイの定式化した能力心理学に基づく諸能力の発達の議論を提示している．しかし，科学の諸原理の訓練を含まないだけ，キングスレイの議論は断片的であり，かつ力強さに欠けるといわざるをえない．

それでは，キングスレイは古典語をどのように弁護するのか．ここでの論法はまずは一変して，第一には既存の専門職にとっての古典語の有用性に限定される．すなわち，特にラテン語は，法曹職に特有な表現を理解するのに不可欠である．他方，聖書の一部が著された言語としての古典ギリシア語は，聖職者の学識には絶対に必要な基礎である．また，医学にはギリシア語・ラテン語が昔日ほど必要か検討の余地があるにせよ，しかしこの分野でも，その歴史を遡り調べる場合には古典語は極めて有用である，等々．確かに，キングスレイは以上に続けて，あらゆる専門職の場合に言及する．しかし，そこでは古典語ではなく，「一般的な文学の素養は，広範な人々と付き合う為の資格の一つ」と，文学に戻ってしまうのである．[70]そうなれば，古典を現代語で読んでどこがいけないのか，との疑問をたちまちに引き起こすであろう．キングスレイによる古典語の弁護は，伝統的な専門職にも十分な説得力を欠くが，新興の諸職業にたいしては，更に脆弱とならざるを得ないのである．

既述のようにヘルプストは，コプルストンによるオックスフォード教育の弁護が，極めて防戦的であったと述べている．しかしこの点は，キングスレイのイェイル・レポートについても，殆ど同じようにあてはまる．すなわち，上述した以外は，キングスレイの古典語教育の擁護は，いずれも新提案への反批判，ボクシングでのカウンター・パンチとしてのみ発せられているのである．キングスレイは，ギリシア語・ラテン語に替えて，近代の諸言語を導入する提案を批判する．どのようにか．彼によれば，古典語は近代諸言語の源でありながら，しかし後者とは画然と異なった構造をもち，その理解には相当な注意力を要する．ここに精神の訓練の可能性が見い出される．翻って近代の諸言語を観察するに，英語との共通点はあまりにも大きく，違いは少数の慣用語法に尽きるといって過言ではない．その帰結として，精神陶冶の機能の点から，古典語と近代諸言語との違いは決定的だというのである．単純化していえば，易しい近代諸言語ではなく，難しい古典語こそ，教育上有用だということであろう．ところで，キングスレイは近代諸言語を勉学の対象とすること自体

を否定しているわけではない．スペイン語，イタリア語，フランス語を学ぼうとするなら，ラテン語から始めるのが，最も確実かつ自然だというのである．[74] しかし，言語の習得を目指す者に限れば，キングスレイの論が矛盾して響くのは当然ではないだろうか．習得が実に易しいフランス語やスペイン語を学ぶのに，何故わざわざ難しいラテン語を経由しなければならないのか．古典語が背負う文化的な威信を除いて，論理的な説明は見出せないのである．

次いでキングスレイのカウンター・パンチは，古典語教育に関する現状と改革との折衷案に向けられる．その一つは，カレジ入学前までは古典語を要求し，入学後は近代語・近代文学のみを履修する方法であり，別なやり方は，入学後に近代文学か古典文学のいずれかをかを選択させる方法である．これこそダーリングがイェイルに突き付けた問いそのものである．キングスレイによれば，何れを採用しても，古典語の徹底的な訓練にゆるみが生じる．その結果，古典語の中途半端な訓練しか受けなかった卒業生が輩出され，その多くは能力の欠陥にもかかわらず中等学校のギリシア語・ラテン語の教師となって古典語教育を荒廃させ，ひいては伝統的なカレジの屋台骨を揺るがす事態を招くという．[77] キングスレイの分析はリアルであるが，それは折衷案への反論というより，古典語教育の 崩壊の見事な描写となっているというべきである．更に抜本的な制度として，古典語・古典文学を学ぶ旧来の課程と，主に科学を学ぶ新しい課程とを併設する実践案も検討のまな板に載せている．平行課程である．しかし，キングスレイは，イェイルに関する限り，互いに傷つけ合うだけで，失敗に終わるだろうと，この制度も退けている[注44]．[80]

最後にキングスレイは，当時のカレジにたいする批判を二つ取りあげ，回答をする．第一は，第一部の冒頭で触れたカレジの保守性への非難である．すなわち，外の社会での大変貌に比して，カレジは，ヨーロッパの制度を輸入した約二世紀の昔以来，旧態依然に止まっている，との批判である．[84] こうした非難にたいし，キングスレイは創立程ないイェイル・カレジでの教育課程の実態を指摘した．1714 年に卒業した二名の著名人の回顧から判断すると，当時のイェイルではキケロや新約聖書，詩編等の作品を原語で読んだ他，算術と測量術とを加えた程度であった．その後一世紀の変貌ぶりについては，解説の必要はないであろう，とキングスレイは主張する．クラップ学長時代の数学・自然哲学の大進歩を初めとして，この間カレジの教育制度・内容は実に著しい変化を被った．外の社会の変貌が目立ったにせよ，それはなお「カレジでの変化には及ばない」[86] のである．

次いで，カレジの教育方針に関わる，黙認しがたい二点の批判があった．その一つは，カレジの実施する試験が茶番で無内容だ，という非難である．キングスレイは，イェイルでの試験は多くの日時を費やす徹底した内容のもので，学生たちも真剣に取り組み，評定の有力な根拠を提供すると反論する．もう一点は，カレジでの教授活動が宿題の確認作業に終始し，学生の指導が徹底していないとの批判である．キングスレイによれば，教授やチューターたちは，必要に応じて個人指導も実施することを含め，実際は「学生たちの精神活動に直接かつ精力的に働きかけ」ているのである．[89] かくしてキングスレイの総括によれば，1820 年代のカレジは，徹底した教育を施して専門職その他を目指す若者たちに成功を保証し，そうした努力の中で，外の世界でのあらゆる障害にもかかわらず，古典文学は却って「着実に進歩しつつ」[90] あったのである．「進歩しつつ」あったというキングスレイの主張は誇張であろう．しかし，イェイル・レポートは確かに，19 世紀の末にまで，広範な影響を与え続けるのである．殆ど回答らしい回答を提出できなかったにも関わらず，何故イェイル・レポートは古典と古典語教育の擁護に，大きな役割を果たしたのだろうか[注45]．

キリスト教のための古典語：法人委員会の決着

イェイル・レポートは，デイの著した第一部，

キングスレイの著述した第二部および，法人から検討を付託され，本来は報告書そのものを起草する責任を負っていた委員会による報告からなる．（以下法人報告書と略記）法人の委員会は，事柄の性格に鑑み，まず提起された問題への教授団の意見を徴した．デイとキングスレイによる報告書がその成果であった．委員会によれば，彼らは「本主題を十分な力量をもって論じた」ので，自分たちは責任の大半から免除されることになった，と判断した．[94] しかし，古典語の廃止という提案の重大さを見据え，そうした提案に反対する所以を一通り反復する必要を痛感して [95]，法人報告書を草したのである．

法人報告書は，専門職への準備として，また文芸面で古典への全面的な依存からしても，ヨーロッパと合衆国とで，古典語の決定的な重要さに関しては議論の余地なく決着がついていると断定した．この点では，キングスレイと同意見である．しかし，デイのレポートをも踏まえた法人報告書には，キングスレイにはない言及が見い出される．一方では古典文学・古典語の保持を完全に支持する法人報告書は，同時にデイが強調した科学の諸原理を無視できないのである．法人報告書は，古典語を廃止した場合のカレジの学位の価値低下を警告するが，そうした学位ではもはや「偉大な文芸および科学上の学識達成の証拠」[100] を欠くと述べて，科学にも言及する．しかし，古典語の保持が科学上の学識達成を可能とする仕組みの説明はない．あるとすれば，古典語が記憶，判断力，伝達力を向上させるという点であるが，これでは十分に説得的でない点は，委員会自身が認めているようである．というのは，古典語がそうした諸能力を向上させると主張しながら，他方で委員会は，古典の学習と，若者の科学への関心の伸長とを，英雄の神話を通してつなげようとする．すなわち，古代ギリシアの英雄は，流血を伴う武勇の達人であるが，彼らを称える詩と散文は，現代の若者を「流血を伴わない高い価値のトロフィーの獲得を目指し，科学の諸分野へと向かわせるかもしれない」[106] からである．

しかし，こうした議論からでは到底，古典教育が科学の研究の基礎であるとの結論は引き出せない．委員会もキングスレイの二番煎じで，能力心理学と，教養の涵養とに訴えるのみである．[109] しかし，こうした論の展開では堂々回りとなる他はない．では，委員会はどこで議論に終止符を打とうとするのか．委員会は，専門職への準備における古典の役割も再論する．しかし，彼らのトーンは，デイとキングスレイのとは多少異なる．委員会によれば，古典語の役割は，聖職への準備において最も遺憾なく発揮される．議論は，アメリカ合衆国でのカレジの原初の存在目的へと直立ち戻る．一体カレジはそもそも何の目的で原野に設立されたのか．「教会の教父や保護者たちの前例と意図とに従って，真理をその単純さ，美しさ，力強さにおいて識り，伝達する」[113] ためである．古典語，中でもギリシア語の廃止は，カレジがキリスト教をその起源において忘却する方向へ，決定的に歩み出すことを意味する．「神による真理が古代の言語により人間に伝達されたという一事だけを考えても，件の問いには終止符を打ち，これら言語の地位は永久に保証されるべきなのである．」[113] 委員会が古典語を守ろうとしたのは，科学教育の基礎としてでもなく，能力心理学上の特別な役割を根拠としてでもない．むしろ，キリスト教という啓示宗教を，その起源の精確な研究と理解とに関して，決然と守り堅持して行くためであった，と述べても過言ではないのである[注46]．

こうして，第一部，第二部，さらに法人報告書を比較するなら，イェイル・レポートのどのような特色を窺うことになるのか．筆者の先の論文でも指摘し，ユルゲン・ヘルプストの論述からも明らかな如く，同レポートは多様な解釈を受け入れる．そこにイェイル・レポートの「古典」たる所以の一つもあるのであろう．けれども，本論文で明らかにしたかったのは，同レポートの第一部と第二部とでは，その主張にかなり大きな隔たりがある点である．類型化すれば，第二部には 19 世紀初頭のオックスフォード対『エディンバラ・レヴュー』誌の論争との類似点が目立つ．他方デイの第一部は，更に遡ってカントの『学部の争い』と

の類似点に着目し，分析することで有意義となる．こうした着眼点からイェイル・レポートを分析することで何が知られるか．

まず第一に，同レポートと能力心理学の関係である．確かに，第一部および第二部を通して，若者の様々な能力を伸ばす上で，数学や古典語が特別な機能を果たす，という論点は目立つ．しかし，第一部をカントの『学部の争い』と比較するとき，能力心理学の役割はデイの論点の中で背後に退いてゆく．イェイル批判者たちは，有用な応用科学対無用な古典語の図式を前提に，後者から前者への転換を同カレジに迫った．これを受けて立った数学者・自然哲学者のデイは，死言語を，文芸と科学の諸原理へとシフトすることで，現行のカレジ教育は十分に「有用」であると主張した．カントは，政府を通して国民の有用性に奉仕する専門学部と比べ，無用と看做された哲学部が，理性の立場から，専門の教育と研究とを批判的に検討し，極めて有用な学部となると主張した．下級の哲学部と，上級の専門部とが，その位置を逆転させる日が来ると確信していたのである．デイにとり，文芸と科学，中でも科学の諸原理は，有用な技術や技能よりも遥かに「有用」なものであった．専門職やその他での職業訓練の内容よりも，遥かに抽象的かつ高度なものであった．両者には，原理的で理性的な方法と，有用な応用分野との対立，そして原理的で理性的な方法への信頼という共通点が見られる．カントには哲学部をやがて第一番の学部へと引き上げる正当な期待があったし，デイには「優れた基礎を築く」カレジの教育を，後の実務訓練よりも，上位に位置づける矜持があった．カレジ教育へのデイの絶大な信頼は，そうした判断に由来するように思われる．

これとは対照的に，キングスレイによる第二部は，オックスフォード対『エディンバラ・レヴュー』誌との対決と，類似している．古典を弁護するとき，両者は教育史上に顕著な古典の普遍性と，西洋文明のギリシア・ローマへの根本的な依存関係を指摘する．たとえ，キングスレイが能力心理学の図式を用いるときでも，彼による古典の擁護では，その図式は第二義的な役割しか果たさない．キングスレイは，古典が有用な科学の研究に貢献するとの主張は，一度も展開しないのである．この点では，アダム・スミスの分業論のオプティミズムを突き，人間の疎外状態の克服して全人性を回復するために古典の果たす意義を説いたコプルストンの方が，遥かに積極的であったとさえいえる．

いずれにせよ，今後のイェイル・レポートへの言及には，何よりまず第一部と第二部とに区別をつけることが，必要であると思われる．

Notes

注1 「イェイル・レポートのカレジ財政的観点からする解釈」『教育研究』43，2001 年，2 参照．

注2 Frederick Rudolph. *The American College and University: A History.* The Univ. of Georgia Press, 1990, 113-14; do. *Curriculum: A History of American Undergraduate Course of Study since 1636.* Jossey-Bass, 1977, 85-87 参照．例えば Hobart College は，イェイル・レポートに先立つ 1824 年，ギリシア語・ラテン語なしで B. A. の学位をその卒業生に授与している．(Milton H. Turk. "Without Classical Studies." *The Journal of Higher Education*, October 1933, 339-346.) また，ジェファーソンの創立したヴァージニア大学でも，古典語は大学レヴェルでは必修でなく，専門の諸分野のうちの一つでしかなかった．但し，Yale Reportの前後にあたる 1822 年から 1842 年の 20 年間，ヴァージニア大学で学んだ北部諸州の出身者はわずか 32 名でしかなかったという．(George E. Peterson. *The New England College in the Age of the University.* Amherst College Press, 1964, 14)

注3 Jurgen Herbst. *The Once and Future School.* Routledge, 1996, 3 章参照．

注4 "La Place, Traite de Mechanique Celeste." *The Edinburgh Review.* XXII (Jan. 1808), 283.

注5 "Strabonis Rerum Geographicarum Libri XVII. Oxford, 1807." *The Edinburgh Review.* XXVIII (July 1809), 434.

注6 "Edgeworth's *Professional Education.*" *The Edinburgh Review.* XXIX (Oct. 1809) 44-52 参照．

注7 両者による反論は，後にヘンリー・ニューマンの『大学の理念』の第 7 話で広範に紹介，引用されたことにより，不朽の地位を獲得した．John Henry Newman. *The Idea of a University.* Univ. of Notre Dame Press, 1982 (1852), "Knowledge Viewed in Relation to Professional Skill" を参照．

注9 (Edward Copleston). *A Reply to the Calumnies of the Edinburgh Review against Oxford.* Oxford, 1810, 15-22 参照．

注10 (Edward Copleston). *The Examiner Examined, or Logic Vindicated.* Oxford, 1809, 35-39 参照．

注11 (Copleston). *A Reply to the Calumnies ...* 28 参照．なお現代でも，トーマス・クーンがアリストテレスに独自な「自然科学」を想定する必要を論じている．『科学革命における本質的緊張』みすず書房，1998 年，「自伝的序文」参照．

注12 (Copleston). Op. cit., 31-103 参照.

注13 (Edward Copleston). *A Reply to the Calumnies of the Edinburgh Review against Oxford.* Oxford, 1810, 104-111. なお，コプルストンによるアダム・スミスの分業論批判をいち早く評価したのは，オックスフォードの同僚ジョン・デイヴィソンであった．(John Davison. "Replies to the Calumines against Oxford." *The Quarterly Review.* IV (Aug. & Nov. 1810), 201.

注14 (Copleston). *Op. cit.*, 113-15 参照.

注15 Ibid., 131-35 参照.

注16 Ibid., 138-44 参照.

注17 Ibid., 151.

注18 Wilhelm von Humboldt. *Schriften zur Politik und zum Bildungswesen.* J.G. Cotta, 1964, 256.

注19「イェイル・レポートのカレジ財政的観点からする解釈」6-8 参照.

注20 (Copleston.) *op. cit.*, 154-55.

注21 John Playfair の科学上の業績については，I. Bernard Cohen. *Revolution in Science.* Harvard Univ. Press, 1985, 523ff を参照．Edward Copleston については，Charles Edward Mallet. *A History of the University of Oxford.* Vol. III, Methuen, 1968 (1927), 183-85を参照.

注22 "*Calumnies against Oxford.*" *The Edinburgh Review.* (April 1810) , 167 参照.

注23 Jeremiah Day の教授職は，正式には Professor of Mathematics and Natural Philosophy と記載されている．(*Catalogue of the Faculty and Students of Yale College,* November 1817. New Haven, 1817, 3.) デイは大部の数学の教科書の外，いくつもの科学論文を著している．前者については，後の註を参照．後者の例は "Observations On the Comet of 1811." *Memoirs of the Connecticut Academy of Arts and Sciences,* Vol. I.-Part III (1813), 342-52.

注24 Herbst. op. cit., 29, 32 参照.

注25 19 世紀の前半に，カレジに続く職業訓練の制度が実際に確立していたという意味ではない．1850 年代までをとると，専門職向け学校で学んだ者のうち，カレジからの B. A. をあらかじめ取得していたのは，約 8 パーセントから 20 パーセント台しかなく，そうした学校はカレジの上に立っていたのではなく，カレジと並立していたのである．(Roger Geiger, ed. *The American College in the Nineteenth Century.* Johns Hopkins, 2000, 271 参照.)

注26 Immanuel Kant. "Der Streit der Fakultaeten." In *Schriften zur Anthropologie, Geschichtsphilosophie, Politik und Paedagogik.* Insel-Verlag, 1964, 294-95.

注27 *Ibid.*, 299-300. Kant の哲学部論と Newman のカレジ論とを比較した舟川一彦氏は，前者がシェリング，フィヒテ，シュライエルマヒェルと哲学部の無限の膨張を主張するのにたいし，後者はあくまでカレジ教育の分際を守る立場を貫いた点で，両者は決定的に異なるという．『十九世紀オックスフォード：人文学の宿命』上智大学，1999 年，62-64 参照.

注28 *Catalogues of the Faculty and Students of Yale College,* November, 1817, 15; November , 1827, 22;1837-38, 35. ちなみに，ハーヴァードの要覧に神学生，医学生，法学生が正規に登録され始めるのもほぼ同じ 1810 年代である．Massachusetts Historical Society, *Proceedings*, Oct. 1864, 57 参照.

注29 Brooks Mather Kelley. *Yale: A History.* Yale Univ. Press, 1974, 132, 145-46, 164n 参照.

注30 Herbst. op. cit., 32 を参照.

注31 例えば，Walter B. Kolesnik. *Menal Discipline in Mondern Education.* The Univ. of Wisconsin Press, 1958, 11-12; Louis Franklin Snow. *The College Curriculum in the United States.* (Printed Ph. D. Dissertation, Columbia Univ.) 1907, 143-44 を参照.

注32 Willis Rudy. *The Evolving Liberal Arts Curriculum.* Teachers College, 1960, 1.

注33 Robert E. Proctor. *Defining the Humanities.* Indiana Univ. Press, 1998, 16 を参照.

注34 Stanley M. Guralnick. *Science and the Ante-bellum American College.* The American Philosophical Society, 1975, 46.

注35 *Catalogue of the Officers and Students in Yale College,* November, 1826 参照.

注36 *Memorial of the Class of 1830, Yale College.* Hartford, 1871, 17, 34.

注37 Philip A. Bruce. *History of the University of Virginia.* Vol. I, The MacMillan, 1920, 322-23 参照.

注38 例えば，18 世紀末のプリンストン (College of New Jersey) での代表的な数学者 Walter Minto も，この順序で数学の意義を提唱したようである．Brooke Hindle. *The Pursuit of Science in Revolutionary America, 1735-1789.* The Univ. of North Carolina Press, 1956, 330-31 を参照.

注39 Jeremiah Day. An Introduction to Algebra, Being the First Part of a Course of Mathematics, Adapted to the Mehod of Instruction in the American College. How & DeForest, 1814, 3 (The Original Copy may be consulted at the Yale Uinversity Archives).

注40 Yale Report に前後して，それまで大学その他で講じられた応用力学の浩瀚な著作が公開されている．そうした論述における数学の役割の実例を瞥見するには，以下，特に後者を参照のこと：Zachariah Allen. *The Science of Mechanics, as Applied to the Present Improvements in the Useful Arts.* Hutchens, 1929, 365pp.; James Renwick. *The Elements of Mechanics.* Carey & Lea, 1832, 508pp.

注41 Proctor. op. cit., 91-92, 104 を参照.

注42 R. R. Bolgar. *The Classical Heritage and Its Beneficiaries*. Cambridge Univ. Press, 1958, 328 を参照.

注43 (Copleston.) *A Reply to the Calumnies* ..., 113 参照.

注44 イェイル・レポート当時，平行課程の導入実験をしていた有力なカレジの一つは，アムハーストである．1829 年の 4 月，『北米評論』は，農業，工業の学校が目立つ中で，実業教育の立場から active life を求める人々には，カレジでは古典語を近代諸言語に替えてよいと提案．しかし，カレジで古典語を守ろうとする人たちも，国家の利益を考えそう主張している，と述べイェイル・レポートにも理解を示している．(*North American Review*, April 1829, 310-11; George P. Schmidt. "Intellectual Crosscurrents in American Colleges." *The American Historical Review*, XLII, October, 1936 To July 1937, 51 参照)

注45 明治の末年に日本を訪れ，東京帝国大学での教育を観察したウェスタン・リザーヴ大学学長のチャールズ・スウィングは，日本の学生には「精神の働きにおける精確さの欠如」が目立つ点を指摘し，その原因として西洋でのギリシア語・ラテン語の訓練に匹敵する内容を欠く点を挙げているほどである．(Charles F. Thwing. Universities of the World. The Macmillan Co., 1911. 266-67 参照.)

注46 但し，この主張はすでに "Edgeworth's Professional Education." *The Edinburgh Review*. XXIX (Oct. 1809) 44 で次のように展開されている．「聖書の相当な部分がギリシア語により伝来しているという一事だけで，例え他の理由が皆無でも，教育によりギリシア語通の学者たちを供給すべきなのである.」

以下の第二部・第三部の訳業は，はじめは串本剛，山下智子，村瀬泰信，新井元，立川明の共同作業として開始された．第二段階では，村瀬・新井・立川で全部を再検討し，最後に立川が全訳文に徹底的に手を入れた．したがって，翻訳者として，当面三名の名前を挙げておくが，最大の責任は立川にある．

なお訳語について以下を述べたい．

「古典語」は，原則としてギリシア語・ラテン語を意味する．これにたいして，イタリア語，スペイン語，フランス語等の近代言語を総称する場合には「近代諸言語」の表現を用いた．こちらの方が言語の数が多いからである．なお，第二部以下でも，第一部の後をうけて，全てのパラグラフの冒頭に[ ]を付し，通し番号をつけた．上論文中での[ ] 内の番号は，いずれも第一部，第二部，および第三部の対応するパラグラフを示している．

イェイル・レポート（1828 年）第二部

共訳

立川　明／新井　元／村瀬泰信

[57]一般的には教養教育とは，精神の諸能力を強化し拡張すると同時に，精神が人間の探究と知識との偉大な諸対象に関する主要な諸原理に精通するように，計算し尽くされた文芸および科学の訓練課程である，と理解されていると信じる．教養教育は，専門職向けの教育とは明瞭に区別される．教養教育は，人生のいかなる状況においても，それに熟知していることが必要かつ有用であるような諸原則に精通するための教育であり，これにたいして専門職向けの教育は個人を，家業であれ雇用による職であれ，ある特定の身分に向けて資格づける諸原則に精通するための教育である．前者は時間において先んじており，後者は自身の基礎として最も相応しい前者に依存している．教養教育は，精神の諸力がまだ外に向かっておおらかに拡大している時期に，精神を占有するのが相応しいのにたいして，専門職向けの教育には，学業を通して既に涵養され，ねばり強い組織的な努力の訓練により準備された理解力を必要とするのである．

[58]カレジ教育のシステムは，こうした諸見解に基礎をおくといってよいであろう．人々が信じてきた所では，最上の教育を受ける者であれば，また趣味，年齢，仕事の違う者たちと有意義に交わる用意がある者，更には専門職向けの訓練や実践の任務に，高い成功の見込をもって乗り出す者であれば，誰でもが知っているべき一定の共通な知識主題が存在するのである．リベラルと呼称されるこの教育は，その始元においては，文芸上の関心事や仕事として実在した諸対象を基礎としていたことから，そうした教育は常にかような諸対象を基準と仰ぎ，知識の状態の変化に応じて変容してきたのである．したがって，かつては評価も受けず，教養教授の課程では占める場を持たなかった内容が，別な環境の下では名声を高め，それに相応しい注目を勝ち得てきたのである．これまで

カレジの課程に起こった諸変化が規模の点でも頻度の点でも十分であったか否か，それは今ここでの探究の主題ではない．当面の目的からすれば，こうした諸変化という事実を指摘し，それらの正当性を認めれば十分なのである．

[59]とすれば，教育がリベラルであるためには，知識の主要な諸分野に基準を仰がねばならず，しかも知識が変化するに伴って教育も変容すべきなのである．

[60]ここで提示している探究の主題は，イェィル・カレジで行われている教育課程が，果たして文芸と科学の現状にたいし十分に順応しているか否かであり，なかんずく，現在の課程からギリシア・ローマの古典を取り除き，リベラル・アーツの学位には古代の文学の熟知はもはや不要とするような変革が，果たして必要であるか否かという主題なのである．この主題を直接考察するに先立ち，前置きとして，教養教育のもう一つの分野について，二三の点を述べておくことが有益であろう．そうすることで，カレジの教育課程全体のうちで，ある場合にはその一つの部分にたいし，また別な場合にはもう一つの部分にたいして，どんな種類の反対意見が言い立てられているのかを遥かに明瞭に示せるからであるし，更にまた，そうした反対意見を持ち出す者たちの諸見解がいかに狭量でかつ不適切であるかを一層明らかにできるからある．

[61]数学の学習が有用であることは一般に認められている．それゆえ，数学が完全に排除されているような教育課程をリベラルと看做すような者はほとんどいない，いや恐らく皆無であろう．少なくとも，実践的な教育こそを目指す目標と公言している諸機関において，数学の学習は突出した位置を認められている．しかも，こうした諸機関では，ギリシア・ラテンの古典語は，実際的な有用性を殆どないし全くもたないという理由で，部分的にか全面的にか排除されているのである．もしも，数学の学習がもつこうした暗黙の主張の根拠は何であるのかと問われれば，その答えは手元に用意されている．教育という仕事に精通する最も有能な者たちが皆同意するように，数学の学習は，知性を研ぎすまし，合理的に思考する能力を強化し，真理を発見し誤りを検知するに有効な一般的な精神の習慣を引き起こすのに，格別に適応しているからである．更に加えて，数学は大部分の実践的諸科学の基礎に位置しており，またそうした諸分野の諸原理を例解したり，生活の諸目的に応用したりする場合に，貴重な助けとなる．数学はまた自然科学の種々の分野を学ぶ際の最上の準備となり，他の諸主題ににについてわれわれが合理的に思考するほとんどの場合，少なくとも間接的な影響を及ぼし，役に立たないわけではないのである．

[62]しかしながら，この点には真実が多々あるにしても，数学の知識は大多数の学生たちには実用的ではないと，ときおり反論が出される．大多数の者たちが応用する機会があるのは，せいぜいが算術の平易な諸規則どまりではないか，というのである．これら諸規則に簿記の知識を加えれば，知のこの分野について，それ以上の広範な情報の欠如を実感する者は，実際ほとんどいないのではないだろうか．航海術，測量術，天文学，および数学的な諸原理を大きな構成素とするその他の諸科学の研究を可能にする他は，さして有用でもない数学という知識の種の獲得に，上記の諸科学のいずれにも実際に従事する希望や願望がない学生まで，何故に何年も強制的に打ち込まされねばならないのか，しかもこの科目全般が嫌いであるがゆえに，かくも大きな努力で学んだものを，数年の後には忘却してしまうものを・・・と疑問が呈されるのである．もし神学や法，あるいは医術に専念している者が，航海術の原理を何にせよ知りたくなったら，この学問の理解を専門とする誰かに尋ねさせればよい，と反対者はいう．もし彼がある物質を分析してもらいたいなら，それを本職の化学者に依頼させればよい．もし彼がある鉱物の名称や，特性，その用途を知りたければ，鉱物学を愛好するゆえに，それが包摂する多数の事実や詳細を熟知し，その専門分野の秀でた知識によって，その境界内部で実際に仕事をもつような，そういう鉱物学者に問わせればよい．もし彼にとって，日の出や日の入り，月の出や月の入りの時

刻や，ある蝕の時刻，部分か皆既か，あるいはその持続時間を知るのが重要なら，暦書を購入させれば，これら事象の全部の知識へと導く道は，その一つを自分で計算し確定する場合より遥かに近道となる．諸科学は，それに関心をもつ者，そして生計を立てるために少なくともそのある一分野を追求するつもりの者のみに学ばせよう．どの科学にせよその知識が有用なら，この知識への需要が，その科学の存続のみでなく，ちょうど必要とされている程度にまでその普及を，保証してくれるであろう．これ以上は全て単に無駄であるに止まらず，有害でさえある．市場で売れない品物を製造する者たちは，政治経済学の諸原則の「いろは」に逆らって行動しているのである．もし諸商品が求められていないなら，だれにせよ，供給過剰が起こるであろうと理解するわけで，商品を供給し続ける製造者は自ら墓穴を掘ることになる．すなわち，数学が実用へと実際に応用される以上に教えられているような諸教育機関は，必然的に公衆によって見捨てられるであろう，と．

[63]しかしながら，これら全ての問題点や反対にもかかわらず，ここで問題にしている知識は依然として実践的である．反対者が採用している狭い視野においてではなく，むしろもっと高く同時に広範な視野においてであって，この点に手短な説明を加えておくことが有用であろう．数学の知識という基金を積み上げ，しかも数学的諸原理に立脚する諸科学にまで探究を拡大した学生は，仮に科学の実践的な応用の仕事には全然携わらなくとも，そうした類いの仕事に従事する者たちと有意義な関係をもち，こうした関係から極めて重要な便宜をこうむるのである．彼のような人物は，他の者たちの仕事を判定し，そうした仕事の価値を見積もり，科学の進展を理解し，人類の大きな部分が従事する仕事に関心を抱くことができるのである．彼自身の身分が私人であろうと公人であろうと，専門職に携わっていようと，あるいは行政職としての使命を果たす立場にあろうと，彼がその知識を用いる機会は数多い．一歩譲って，諸科学の詳細の多くないし大部分は彼の記憶から失われるとしても，にもかかわらず彼は情報をどこに求めるべきか，またどのように探究を方向づけるべきかを知っている．同じように彼は，具体的な企画の達成のために人を用いようとする場合，どんな分野のどんな代表的人物についてであれ，その才能とみせかけとを正確に見分け得る．彼は自分の居る領域を熟知し，何か試みる場合でも十分な分別をもってし，またその知識のゆえに，どんな業務取り引きにおいても，十分に実務に長けた人物となるであろう．学生は同様に，諸科学の一般諸原則に精通することにより，自分に才能がありまた向いていると思うどんな分野でも，自分でやりたいだけ探究する準備ができることになる．こうした教育を受けるなら彼は，すでに言及した精神陶冶から生じる利点に加え，思考の範囲を拡大し，彼の得られる高質の情報の中から，他の者たちに便宜と影響とを及ぼすための新しい手段を見い出し，かくて彼の精神はリベラルな知識によってその限りまで自由となるのである．

[64]同様の根拠で，教養教育における古典文学の効用および必要性を擁護できる．現在，ヨーロッパとアメリカ合衆国の双方での学問訓練において，古典学習が重要な地位を占めていることは否定できないだろう．イギリス諸島においても，フランス，ドイツ，イタリアにおいても，いや実際のところ，文学が重要な地位を占めているその他すべてのヨーロッパ諸国において，ギリシア・ローマ古典は教養教育の重要な部位を構成しているのである．ある国々では古典学習が一時の衰退から息を吹き返しつつある一方，そうした衰退など経験しなかった国々では古典はますます熱心に追究されている．古典が人々の尊敬を失った国など存在しないことは明白である．今日，人生の特定部門における古典学習の効用については，以前よりも多様な意見があろう．にもかかわらず，リベラルと呼ばれるに相応しい主張や体裁をなんであれ備えた最高級な教育にとっては，古典教育が不可欠であるという信念が揺らいだことは一度も知られていない．ヨーロッパ諸国の文学は多かれ少なかれ古典文学に基づくものであり，そのもっとも重要な具体例は古典文学を根源として派生したものである．こうした事実関連は，かなり以前に

登場して現代の標準的な文学の形を作っている作品のみならず，ずっと最近に出版された作品，さらには現今の定期刊行物などからも明らに窺うことができる．古典の学識は，あらゆる学問的議論に織り込まれている．ここで主張しているのはただ「事実」のみである．しかも，その事実は否定しようもないのである．誰であれ，古典の準備教育を欠いたままで，学問研究に携わったり，文学上の問題点について論考を試みたり，あるいはヨーロッパ諸国やわが国で教養人と認知された人々と交際したならば，その者は自らの教育の欠点に直ちに気づき，実践的な学問の重要な部分の欠如を強く認識することだろう．だとすれば，もし学生たちを，疑問の余地なく実在する教養人の世界での活動に向けて準備するという前提に立つならば，古典文学は，純粋に実用的な配慮からして，学生の若いうちの訓練において重要な部位を構成すべきなのである．

[65]しかし，古典教育を擁護する主張はこの一つの見解に限られてはいない．古典は現代社会の教育に必須な一分野としてばかりでなく，明確に独自な価値を有するという理由で擁護することもできる．ギリシア・ローマの文学家たちに通暁することは，人の嗜好を形成する点，思考や言い回しに関し高尚で上品で簡素なものを好むように精神を陶冶する点で，なかんずく適している．これらの文学家たちが我々に残した作品は，散文のもの韻文のものも共に，構造，文体，様式，あるいは全体の仕上げの点から見て，他の何にもまして，完璧な知を備え訓練を受けた人間の精神が，当然にも肯首する内容に近いのである．そうした作品はまた，人間であれば備えているべき最上のもの，すなわち文学上の価値を決定するための基準を構成するのである．古代の文学家たちにみられるこうした卓越性が今まさに疑問に付され，あるいは否定されようとしている．それゆえ，ここでの主題として許される限り，古典の価値の証拠を示すことが必要となるのである．

[66]ここで考察しようとする問題には，類推が伴わざるを得ない．人間の進歩を画した領域の中には，性格の上でも状況の点でも，これまで主張してきた事実と，かなり似通っており，またそうした事実を強力に支持してくれる，他の諸事実が存在する．最も定評ある形の建築や彫刻はそれぞれのギリシアに起源を発するのみならず，ギリシアによって完璧さを付与されたのである．こうした芸術は，ある面では，時代の流れとともに修正されてきた．また，後の世の要求や風潮に見合あうよう適応するために，変化が導入されたこともあろう．しかし，ギリシア精神が生み出した原作品は，現代における芸術家たちにとってさえ手本として，彼らの創作活動に指針を与えている．現代の創作作品の価値は，相当な程度まで，ギリシアの生み出した基準によって決定されている．これを先入観のなせる技であるとか，旧い時代の印象が作った偏見であるとか，さらには古代への行き過ぎた崇拝であるとか，うそぶくのは愚かなことである．彫刻家は，頭部あるいは腕を制作するときは，常に自然を念頭に置いているものである．しかし，にもかかわらず彫刻家は，自然それ自体の最高に確かな解釈者としての，ギリシア芸術の遺品を最上の先導者として，参照してもいるのである．現代の芸術家の作り上げる作品は模倣作ではない．極めて卓越した芸術への熟視と研究から生じた技能を通じて，芸術の完成へと到る捷径なのである．建築においては，古代との接点を全く持たない建築家の眼さえも，単純素朴で正しく均整のとれたギリシアのモデルに感嘆し，そうした第一印象は観察と反省とによって強化されるのである．時間の経過は通常，われわれの仕事の数多い欠点を白日の下に晒し，人間の諸発見の大部分には改善の余地のあることを教えるのであるが，その時間が，古代の建築学の開拓者たちに倣った努力の完成度にたいしては，変わることなく支持を与えているのである．

[67]もしも，彫刻や建築が，幾多の世紀が巡り来た後にもなお古代技術の遺品から助けを得ているのだとしたら，嗜好の他の諸分野でも，古代が同様に卓越性を示しているとしても，驚くには当たらない．詩文や雄弁においても，古代の文物が同じように後世にとっての原型に値する見本を残していたとしても，何ら不思議はない．こうした優

越性が古代文学にも所属することは，唯一つだけの相応しい証拠，すなわち古典が探求され続け，間違いのない嗜好が広く行き渡っていた全ての国の知識人たちの声に証明される．ここでは諸権威に登場を願う必要はなかろう．ヨーロッパの文学は，その事実の何よりの証明である．人々の実際的な判断がかくも絶対的な地にあっては，これ以上疑問を呈する余地はないのである．

[68]しかし，古典の教育が有用なのは，それが正しい嗜好の基礎を築き，学生に，現代の文学に見い出される根本的な諸概念を，その源泉において以外は不可能な仕方で，首尾良く獲得させてくれるという点に尽きない．古典の学習はそれ自体が精神的諸能力の最も効果的な鍛練を形成する点でも有用である．この論題は実にしばしば強調されているので，ここで殊更に繰り返す必要はないであろう．古典が年少者の知性の開花から，その成熟の頂点に到るまで，あらゆる段階の才能を鍛える素材を提供できる点については，極めて粗雑な観察者にとっても，明白なことであるにちがいない．古典の学習の範囲は，言語の初歩に始まり，文学研究とその批評から生ずる最も難解な諸問題にまでおよぶ．精神のあらゆる能力が使用され．単に記憶力，判断力や論理的な思考力のみでなく，同時に嗜好や空想力も動員され，改善されるのである．

[69]同様にして，古典による鍛練は専門職業向け学習への最上の準備となる．言語の解釈やその適確な運用が，聖職や法曹職以上に重要な分野はない．ところで，古典教育の課程でも，そのあらゆる段階において，学生の精神を，言語の構造や語句単語の意味に習熟させている．上記の専門職では頻繁に起こるような，歴史的性格の調査研究においては，特にはラテン語の知識が不可欠である．ギリシア語の完璧な知識が神学者にもたらす効用については，誰も否定しないであろう．勿論，これら専門職においても，古典教育の恩恵を享受しないまま，目覚ましい成功を収めた諸事例のあることは認めざるを得ない．しかし，この種の成功が証明しているのは，才能のある人々は時とするとおびただしい障害を退けながら卓越への歩みを貫徹することがある，ということだけである．教育方針を策定するに当たってわれわれが問うべきは，一部の非凡な才の持ち主の業績ではなく，大部分の者が必要とする事柄である．直前に言及した，人並みはずれた成功の場合であっても，成功者たちはしばしば古典教養の欠如を自覚し，嘆いているのである．

[70]医の専門職では，ギリシア語・ラテン語の知識はかつてほどは必要でなくなっている．だが現在においてもなお，古典教育が可能にする学術用語の理解や精通に関する利便が，古典の学識の獲得に必要な時間や労力を補ってなお余りあるのではないかは，十分に考える余地がある．加えて，医者が自らの専門職の変遷を徹底的に解明しようとするならば，こうした目的には古典諸語の知識が必要不可欠だと悟るであろう．同様に，あらゆる専門職において，一般的な文学の素養は，広範な人々と付き合う為の資格の一つとして極めて重要であろう．それぞれの専門職は，読書習慣や思考の経路が画一化しやすく，その性格が形式偏重である点は，しばしば言及されてきた．自らの専門職についてはどれほど明るくとも，単なる聖職者や法律家，医者であるに過ぎなければ，前の段階でよりリベラルな性質の教育を受けた場合に比べ，成功の機会は小さいというべきである．

[71]カレジでの古典文学の学習に付随しているこれら極めて明白な諸利点にたいし，代替案として提案されるであろう（とわれわれが理解する）方の教育課程が保証する利点は数も少なく，半端なものでしかない．周知のように，ホメロスの叙事詩は後の全時代の英雄詩にたいし，広範かつ重要な影響を与え続け，また，最も重要な批判の規準を打ち立てた作品として，不断に指し示されてきたことは否定のしようのない事実であるが，我々にも提示されたいくつもの新教育課程では，ヴォルテールのヘンリアーデがホメロスに替わると言う．また，同じヴォルテールのカール十二世史が，リヴィウスやタキトゥスの歴史作品に替わると言う．これこそが，当事者には大きな自慢の種となっている教育の改善の実例であり，知識をより実用的かつ平易なものとする変革の具体例である．

しかし，嗜好の規則や，文学の価値を判断する一般原理の熟知に関する限り，一体いかなる意味で，イーリアスについての知識よりも，ヘンリアーデに関する知識の方がより実用的だと言うのだろうか？イーリアスに通じているよりも，ヘンリアーデの知識をもつことの方が，文芸界で活動する上で，どれほど有利な資格を与えるというのだろうか？卓越した批評家たちは，ホメロスよりも高い評価を，詩人としてのヴォルテールに与えているのだろうか？あるいは，ヴォルテールの方こそ，モデルとして一層念入りに研究され，模倣されるべきだと主張しているのだろうか？我々の問いを更に一般化してみよう．英文学の真髄と精神とを理解するにあたって，最大の実用的な効用が期待できるのは，フランス文学であるのか，はたまたギリシア・ローマ文学であるのか？我々の英文学における主要な文人たちにの表面をなぞった知識さえあれば，何故このような問いを真剣に問う必要があるか，必ずや不思議に感ずるであろう．

[72]もしも，一般的な文学の素養への導入を考慮して提案された新しい教育課程が，総じて旧来のものに劣り，またその性格が実用的なものとは程遠いとするならば，そうした教育課程は精神陶冶の諸目的からしても，等しく不十分であることが判明するだろう．ヨーロッパの現代諸言語を熟知するのは，主として記憶面での努力の問題である．これらヨーロッパ諸言語の一般的な構造は，我々の言語の構造とほぼ同じである．少々の慣用語法的な差違はわずかな労力でマスターできるし，ギリシア・ローマの古典的文人たちを研究する場合のように，精緻な比較や区別をする必要もない．これを疑われる向きは，ヴォルテールからの一ページと，タキトゥスからの一ページを比較してみればよいであろう．

[73]古典文学を排除したこの教育課程はまた，専門職向けの学習の基礎としても同じように好ましくない．もっぱらフランス語，イタリア語，スペイン語のみを学んできた学生は，神学や法の課程を開始する準備がほとんどできていない．古い方法で教育された場合に比べ，自国の文学についての学生の知識は少ない．彼の精神の諸能力は，十分に厳しい鍛練を経ていない．また，今や習得せんとする専門職の知識の源からも遠ざかっているのである．近代文学のみの課程は，専門職を志さない者たち向けである，との意見にたいしてはこう返答したい．専門職につくか否か，あらかじめ意思決定しないまま，教養教育を受ける者たちの数は無視できないほど多い．当初はどちらかに決心していたつもりの者たちでも，予期しえない事情から，中途で決心を翻すことは多いのである．提案されている課程を採用してみれば，多くの者は単なる目新しさから，さらに多くは，苦労して学ばずに済むであろうとの確信から，その課程に入るであろう．その結果，こうした動機が作用する限り，カレジはわが国の専門職の品格を低下させる機関となってしまうであろう．しかし，ここで次のように問う向きがあるだろう．ヨーロッパの近代諸国の文学は，教養教育の課程の一部を形作ることはないのか？近代文学は，古代文学と並んで，検討の対象とはなりえないのか？勿論，なりうる．そして我々の公的な機関は，ヨーロッパで広く普及している諸言語を習得するための便宜を供すべきなのである．近代の諸言語にかかわる主張が疑問視されるのは，それらが古典語への代替として提案される場合のみであり，近代諸言語そのものの価値を根拠として勧められる時ではないのである．もし近代文学に価値があるのであれば，そうした文学の最も徹底的な理解へと直截に到るようなやり方で学ばれるべきである．そして，こうしたやり方こそが，古代の文学へと通じているのである．もしもイタリア，フランス，スペインの言語や文学とが，極く皮相なレベルを超えて学生の目標となるならば，それらの言語と文学とはラテン語を通して習得されるべきである．また，実際の経験を手掛かりに判断する限り，こうした方法こそ疑いの余地なく，当該の諸言語に習熟する最も効率的なやり方である．近代の諸言語から教育課程を開始するというのは，自然の順序に逆らうことなのである．

[74]ほとんどの学生は，近代諸言語を習得必需品としてではなく，単なる達成として学んでおり，今後もそのように学び続けるであろう．近代諸言

語の話し方を時間をかけて学ぶ学生たちも，それら言語が常日頃から使用される地域に住まない限り，ほどなくそれら言語の知識を失うであろう．同じように，フランス語，イタリア語，スペイン語を学んだ学生たちは，仕事の経緯でこれら言語の能力を保持しない限り，卒業の後には，ラテン語やギリシア語の場合と同様，それら言語をなおざりにするだろうことは疑いようがない．この点は，特に専門職生活について当てはまる．というのも，そこでは近代諸言語の知識の必要が，古代言語に比べ，総じて取るに足らないからである．近代諸言語が現在も世界のいくつもの地域で話されているという理由をもって，大多数の学生には，近代諸言語の方が古典語より実用的であると想定するのは，明白な誤謬である．ここで問うに相応しいのは，一体どのような訓練の課程が，最上の精神的文化を産出するのか，我々自身の文学の最も徹底した理解を導くのか，専門職向けの学習のための最上の基礎を築くのか，という問いなのである．古代言語はこの点で決定的な利点をもっている．もしも，われわれの学生たちに近代諸言語の初歩を，既存のカレジの課程と関連づけながら習得させることができ，長期にわたってそのための十分な便宜を供するなら，状況が重要かつ有用であるとする場合には，高度なレベルの近代諸言語の習得は容易となろう．ヨーロッパを訪れた当カレジの卒業生たちから時折耳にする不満は，旧世界の文学を知るには彼らの古典の教養の達成度はあまりに低い，というものである．しかし，他方，どれだけ多くの時間をこの科目のために費やしたにせよ，ここで古典の教養を培ったことを悔いる者は，一人として思い出せない．それどころか，古典文学に秀で，同時に英語以外の近代ヨーロッパ諸言語の一つに十分に習熟した者たちは，彼らの新しい利点を活用するには理想的な資質が自分たちに備わっていることを発見する．精神が適切な修練をかつて積んでいる場合には，近代文学についての欠損は容易にしかも急激に補われる．これにたいし，古典文学における欠陥の修復は緩慢にしか進まず，しかも殆どの場合不完全にしか補正されないのである．

[75]ある人々は，一種の中間的な課程を提案している．それによると，学生たちは入学に際しては，ラテン語・ギリシア語の基礎知識をかなり要求される．しかし，一旦入学を許可されると，彼らは古代語を捨て置き，近代文学のみに精力を集中する．あるいは，カレジへの入学の時点で，学生たちがこうした新しい課程を履修するか，それとも長い伝統をもつ方を履修するか選択できるようにする．この場合，いずれのコースを採るグループも同一地点からスタートする，と主張される．連邦の首都を目指す旅人たちのように，それぞれ異なる道筋をたどるが，しかし最終的には，すなわち卒業時には，全ての者がまた一個所に集結し，終には人生での多種多様な職業へと分かれていく，というのである．

[76]しかし，この計画は反対意見に晒されやすい．カレジへの入学以降，ラテン語・ギリシア語を停止する学生たちは，これらの言語を過小評価し，嫌悪するのに丁度十分なだけの知識をもちあわせることになる．こうした人々は，いたる所で古代文学の無価値を言い触らす者となろう．彼らはラテン語・ギリシア語を学んだが，何の益にもならなかったこと，しかもかつてしっかり覚えたことを，全て忘れてさえしまったこと，など．昔の自分の知識への過大評価を別にすれば，どれも彼らにとっては真実なのであろう．更に加えて，実際の社会に出るための教育しか受けなかった彼らは，卒業後，多くの場合に，これらの無価値な言語の教師に自分を仕立て上げることが，実際的には便利であると考えるようになる．彼らは，自分の担う職務にたいして，殆どあるいは全く資格を欠いているので，彼らによる管理のもと，教育と言う大義は必然的に大きな痛手を被らざるをえない．もし，その課程の一部として古典教養を留め置こうとするなら，カレジは予備校における自身の卒業生の指導に依存せざるをえず，カレジこそが改善されたこの新制度から被害をこうむる者となる．カレジ自身が，自分の破壊に寄与する結果となるのである．

[77]更に，これらの別々の道程を経てきた学生たちを最終的に合同させることで，一体何を目指し

ているのか，知りたい興味にかられる．課程の終点において，彼らが同一の教育を享受したと感じるであろう，というのは明らかにその意味ではない．なぜなら，これでは原初の仮定に矛盾してしまうから．唯一判然とした合同は，つまり彼らが全員学位を授与されるということである．彼らは修了証書を受けることにおいて，一体となるであろう．もし，カレジの栄誉たる学位を受けることが教育の一大目的であるならば，カレジの旧課程に加えられたこの改善は実質的なものと看做しうる．しかし，影ではなく実体が，印そのものではなく印の指し示すものが目標であるならば，これら別々の道は旅行者たちを完全に異なった諸地域へと導くのではないかとの疑問にたいしては，依然として自由な検討の余地が残されているのである．

[78]しかしながら，修了証書を教育にすり替えることの誤りは明らかであるにもかかわらず，こうした計画が社会の一部の人々に承認されることもありえないではない．そうした変革に続いて，一時的な人気も起こるかもしれない．また，こうした計画が，学問の旅の古い様式に加えられる改善としては限度である，と信じる理由もないのである．

[79]さて，かくして古典文学の価値は，文芸界一般での評価にかかわるものと，それ固有の価値にかかわるものと，二重であるわけであるが，もしも，カレジが近代文学の方面での達成を根拠に学生たちに学位を授与するのであれば，それが教養教育であると宣言することになり，世間からはその名に値するものとは認知されないであろう．また，このような仕方で学位を受け取る学生たちも，受けた教育がその名の示す内容でないことに，すぐ気付くであろう．教養教育というものは，カレジがいかなる教育課程を採用するにせよ，これ迄長い間そうであったような有り様で，今後も疑いの余地なくあり続けるであろう．古典文学はヨーロッパの近代文学の全体系に極めて深く織り込まれているので，容易なことで脇に追いやれるものではない．カレジは，自身の影響力を過信したり，いかなる意味でも，独裁者として奢り高ぶるべきではない．もしもカレジが，文芸の現在の実相が要求する内容とは異なる教育課程を実施するならば，またもし，文学に通じた人々ならば裁可しないような規則に従い名誉ある学位を授与することになれば，提案のような諸変革を支持したところで，教授団は何ら成果を期待することはできず，せいぜいの所，教育の構想や目的には無知で，教育者に相応しからぬ夢想家，と看做されるのが落ちである．最終的にはいかなる結果となるか，予見はいと容易い．カレジは公衆からの信頼を失い，その名声は回復不可能なまでに失墜するであろう．

[80]もう一つのカレジ制度の改良案は，学位は現在確定されている教育課程の終了者たちのみに授与するが，しかしこれとは別に，カレジの名誉ある称号を目指さない他の学生たちにも，彼らが選択する限度までクラスへの出席を許すことである．この方法は，他のすべての方法に比べ，明らかに優れると想定されている．この方法に従えば，旧いシステムに満足な人々の願望を叶える一方で，様々な境遇の故に部分的な教育を望む人々にも，カレジ教育の機会を開放できるからである．いかなる教育も部分的でありうるが，それでもなお有益でありうることは否定できない．こうしたものとしての教育は，結局の所，社会の大多数の者によって獲得されるような教育に違いない．こうした教育に向けた手段が豊富であるべきこと，こうした教育の振興はあらゆる点でその目的に適合しているべきことに関しては，誰でも承認するであろう．唯一の重大問題は，このように相違する二つの教育組織を，一つの学校の中で適切に統合できるか否かである．当カレジでは，こうしたいかなる統合にたいしても反対論が確然としており，反対者の数も多いのである．

★★★

[81]当カレジとは異なった方式で構成されるている諸カレッジでは，こうした統合への反対はないのかも知れない．しかし，当カレジに関しては間違いなく，二つの種類の学生たちは，互いを傷つけるだけに終わるであろう．

★★★

[82]しかしながら，この種の全ての提案に関して問うべきは，これまで提案されてきたいかなる形にせよ，是が非でもカレジが採用せざるをえないような諸変革への要求が，はたして世間の側に本当にあるのか，という点である．幾つかの公的な雑誌に，カレジ教育の旧いシステムへの苦情が載っていること，ある人々はこの件に関して口喧しく，旧いものは当然ながら全て間違っており，新しいものは当然ながら全て正しい，と主張していることは承知している．しかしながら，当カレジが支持と援助を求める賛同者の大部分が，これら改革者の列に数えられる人たちである，と信じる理由は浮かばない．古典と現代の学問とを徹底的に訓練された者たちのみに学位を与えるという方針を堅持することで，カレジは多くを期待でき，恐れるものは何もないのである．むしろ，長い間辿って来た公道を打ち捨て，小道や脇道に迷い込むことによって，カレジはその成功を弄び，自らへの援助とその存続とを支える手段そのものを，危機に晒すことになるのである．

[83]提出されてきた問いについての以上の一般的な観察に続いて，最近，われわれの諸カレジの現状が論じられる場合，ほとんどいつも持ち出されるある話題について手短かに触れておいても，主題と無関係とは思われないであろう．ここで言及したいのは，カレジというものにたいし，実に多くの形をとって浴びせられた非難のことである．いわく，この国においてさえ，諸カレジでは悪弊を後生大切にしているとか，いわく，諸カレジでは，他の諸世界がとっくの昔に見捨てた後にもなお，時代遅れの認識や習慣が長く残存しているとか，なかんずくいわく，カレジでのあらゆる改善努力は反対に会い，可能なかぎりは排除されるとか，である．

[84]この件に関しては，権威をもって発言すると目されているある著者は，次のように述べている．「公教育の教育課程は，二世紀を経た後にも，殆ど元のまま変化していない．ヨーロッパの教育システムが，改変もされず，われわれのアメリカの諸カレジに移植されてきている．あちらでの事態がいかようであれ，この国の方では大幅な改革が必要であると主張しないことには，何としても憚られる．」別の著者は，われわれの教育諸制度がヨーロッパの諸機関から由来した点，また，当初においては，そうした諸制度がこの国に独自な性格に首尾良く適合しなかった点，に言及した後で，次のように言葉を継いでいる．「しかし，こうした全く同一の制度が殆ど何の変更も経ないまま今日まで引き継がれ，この間わが国の一般的な諸事情は根本的に変化したにもかかわらず，今やわれわれの諸学校を牛耳っている有り様である．」彼は更に続ける．「合衆国において若者が活躍し有用な人物となる資格を与えようと努力するにあたって，旧世界の君主諸国の下で聖職者たちを養成する為に構成された方法を用いるというのは，果たして賢明なのだろうか？」

[85]以上の様な説明は，多くの人々の心に次の様な印象を残すのではないか．すなわち，われわれの諸カレジは，あらゆる重要な点に関して，創設当時そのままであること，教育における改革に最も不熱心なのは教育を生業とする人々自身であること，そして特にカレジで教鞭を取る者たちは，その馬鹿さ加減において，他の全ての人々を凌駕しており，いつまでも同じ小さな石臼を回し続けては，全く同じその回転を視線で追い続けることに満足しきっている人々であること，である．ここでは，われわれの諸カレジの全般的な弁護を試みる必要は無い．当カレジに関する二三の言及で十分事足りるであろう．揺籃期のイェイル・カレジの有り様は，チャンドラーが著した，ニューヨークのキングス・カレジの初代学長であった『ジョンソン博士伝』から，その一部を伺うことができる．ジョンソン博士は，1714 年にイェイルを卒業しており，彼の伝記作家は恐らく，その頃の当カレジに関する情報をジョンソン博士自身から得たのであろう．チャンドラー博士によれば，「イェイル・カレジにおいて多年にわたり古典学習で一般的に試みられていたのは，せいぜいの所，キケロの五つか六つの演説，またウィルゲリウスの同数の作品，ギリシア語聖書のほんの一部，それにヘブライ語の詩編から数編を解釈することであった．一般的な算術と，わずかばかりの測量術

とが，数学の学習内容の到達点であった．当時教えられていた論理学，形而上学，それに倫理学は，幾つかの下らない体系からなるスコラ哲学の蜘蛛の巣に絡まっており，今ならさしずめ虫けら向けの餌として取っておく類いのものであった．実際の所，ジョンソン氏が学士号を取得した当時，学生たちは当時英国で流行していたある新奇な哲学について聞き及んでいたし，デカルト，ボイル，ロック，そしてニュートン等の名前は彼らにも届いてはいた．しかし学生たちは，哲学的諸革新その他から，どんな価値ある進歩・改良が期待できるか，などと心を煩わす必要はなかったのである.」

[86]この著者に特徴的な偏見から考えて，彼の説明の幾つかは，十分に割り引いて受け取るべきであろう．しかし，ジョンソン博士が学部学生であった時代の当カレジに関する彼の解説が，学習課程の範囲に関する限り，大筋において正確であることは，全く別の証言からも確かなようである．当州のノーウィッチ在住のベンジャミン・ロード博士は，90 歳であった 1784 年に，彼が学生であった時代の当カレジの説明を，スタイルズ学長宛に書き送っている．ロード博士はジョンソン博士と同じ年，すなわち 1714 年の卒業である．彼はその手紙の中で次のように書いている．「当時，語学と科学で復誦させられた書物は，キケロ，ウィルゲリウス，バーガーディシウス及びレイマスの『論理学』，ピアソンの『自然学稿本』等でした．私たちはギリシア語聖書を復誦しましたが，ホメロスその他は知りませんでした．『詩編』はヘブライ語で復誦しました．私たちは，エイムズの『精髄』を土曜日ごと，彼の『良心論』からの事例を時たま復誦しました．数学については初歩，その中でも最も平易な事柄の幾つかを勉強し，復誦したに過ぎません．当時の私たちの強みたるやあまりに低レベルで，誰にせよ文学のいずれかの分野で上達するなど，望むらくもありませんでした」等々．無論のこと，この件に関して最小限の知識をもち，かつ邪悪な目論見のない者なら，1714 年から 1828 年の間に，われわれのこのカレジの教育システムに「わずかの諸変化」しか生じなかったとは誰も主張しないであろう．事実はこうした主張とは正反対で，新しい諸学科が追加され，言語，数学，自然学，そして実際にはあらゆる分野が拡充されてきている．ここでは，連綿とした変化を精確に辿ることは不可能である．自身が当カレジの卒業生であるチャンドラー博士の表現の中にも，彼の時代にさえ明らかに，大いなる改善のあったことが含意されている．よく知られていることだが，クラップ学長の任期中には，数学と自然哲学が大いなる進歩を遂げている．1770 年頃からは，英作文と雄弁術への注目が急速に高まっている．過去 30 年以内についていえば，この間に教育課程および指導法の両方に導入された諸変化は，教授団および法人の成員諸氏には記憶に新しいであろう．賢明と思われる学則の規程を通して，教科書の選定，教授の形態，試験の要領，およびカレジの実際的に関心事についての最重要な詳細は，今や教授団の判断と裁量に委ねられている．他方，法人はいつ何時でもそれらを改訂する権利を保持しているのではあるが．教授団が最も恒常的に関心を向けている問いは，カレジにおける教育課程を改善し，実際的にも有用なものに変えてゆくための方策である．同時に，カレジでの教育指導に関する主題については，教授団と法人との間で，常に自由なやり取りがなされている．法人の助力が必要だと看做された場合には，絶えず要求がなされ続けている．こうした進行の過程を経て，当機関の利害関心事は不断に拡大している．卒業の後の数年を隔て，当カレジを訪れる者たちが最も頻繁に口にするのは，改善に向けて諸変革が行われてきている点であり，また精しく調査した者ほど，自ら発見した事実をすすんで肯首するのである．したがって，カレジはダイナミズムを欠く存在であるとか，時代の要請に応える適応への努力を全く払っていないとか，悪弊の永続のためあらゆる努力をしているとか，当カレジは設立以来とほぼ同じままであるとか，こうした告発は全く根も葉もないものである．過去一世紀の間，この国に生じた変化が大きかったとしても，カレジでの変化にはなお及ばない．以上のような主張は，その歴史がわれわれには自明なイェィ

ル・カレジに限って展開してきた．しかし，これまでの引用個所でも言及してきた他の諸カレジも疑いなく，われわれと同様に首尾良く自己弁護に成功するであろう．

[87]当カレジの実に多くの利害関心事を検討に付し，また内部規定のいくつかを提示してその妥当性を擁護することが適切である，との判断に立っているこの報告書では，ある一人の著者が，彼の諸事情から考えて，諸事実の真相にも精通し，かつ自分の宣言内容を注意深く考量したに違いないと思われるにもかかわらず，わが国の全カレジに関し最近に述べた（問題ある）諸言明のいくつかには，十分な注意を払うべきであると考えるが，この点，本委員会も正当にもそれを期待してくれるものと信じる．取るに足らない過ちや誤解については，大目に見るべきであろう．しかし，今回もし沈黙を守れば，極めて重要な諸告発が正当にも提出されたことを黙認した，と解釈されかねない．以下ではこうした諸告発のうちから二点を取りあげて所見を述べるが，そうすることにもし弁明が必要であるとするなら，以上の理由がそれにあたると解されたい．

[88]件の著者によれば，「ウエスト・ポイントを除く，ほとんど全ての教育施設で実施されている公式の諸試験は，手の施しようもない茶番であって，誰にたいしても何の毒にも薬にもならないどころか，試験を課される学生たちにとってさえも全く同様である．」彼は続ける．「六十人もの若者が一年をかけ学習した内容を，わずか一日の試験で，慌ただしく片付けようと言うのは，いかにも怠惰である」等々．わがイェィル・カレジでの試験については，こうした批判がほとんど当を得ていないことを，本委員会の成員諸氏はお気付きではあろうが，しかしわれわれの試験が実際にはどのように実施されているかを，多少入念に述べておくことも不適切ではないと思われる．もし実際にも茶番でしかないのであれば，今こそが改革を開始すべき時だからである．本学では，各学年とも，年に二度の試験を実施する．一年生から三年生までは，各学年を二つの組に分けた上で，その年の学習について年末に試験を行う．それぞれの学年には，一日あまりが割り当てられる．各学年には，前述の通り二つの組があるので，所要期間はそれぞれの学年ごとに全員が二日半を要して受けた場合と同じである．毎年四月の終わりには，一年生から三年生までは，入学以来の全ての学習について試験を受ける．試験時間は長くなるが，その他の点に関しては年末の試験と同様である．四年生は四月に，その時点までの第四年次の学習内容に関して試験される．他学年の試験と同じ様式の試験である．七月には，四年生は学位向けの卒業試験を受ける．彼らは，カレジでの全学習内容に関して，二つの組に分かれて試験される．過去の何年にもわたり，この試験は一日八時間以上で三日間にもわたり，時とすると三日半にも及んだ．学年は二つの組に分かれているので，学年全体を六日か七日かけて実施した場合に匹敵する時間である．諸言語の試験はみな「教科書参照可」の方式である．また全ての学習において，試験者と被試験者の間には，試験の実施方針に関するいかなる申し合わせも存在しない．学生が自分の学年の試験を欠席することはほとんどなく，特に学位に向けた試験に関しては，緊急の事態を除いて決して欠席しない．もし，個別の学生が休んだ場合には，通常の試験日に課せられるのより，一層難しい内容の追試が必ず実施される．したがって，試験を休もうという誘因は学生には働かない．付言しておくべきは，学位向けの試験の最中でも，通常の教授活動は継続しており，その他の試験の場合でも，教授活動への影響は一部分に留められている，という点である．もしこれらの試験の全てが，手の施しようもない茶番というのであれば，何が真実でありうるかを知るのは，興味深いことであろう．もしも，全てが実際にも茶番であったとすれば，試験する方も，試験を受ける方も共に，それに関してこれまで何ら疑いを差し挟まないままであったことになる．そうでないなら，彼らは共に，試験という術語の意味を正確には知らなかったことになる．当カレジでの試験に関して，もはや改善の余地はないと装うつもりはない．本委員会や法人からのこの主題に関する諸勧告があれば，われわれは真摯に受け止めるつもりである．

しかしながら，教授団の見解としてはっきり述べておくべきは，現在実施されている諸学年向けの試験は，学習への強力な動機付けとなっていると共に，それぞれ個別の学生の達成度につき納得のゆく判断を形成するに際し，特に他の諸機会と組み合わせて，有力な手段を提供している，という点である．

[89]現時点で注意を払うべきであろうもう一つの非難は，合衆国のカレジではどこでも徹底した教授を行っていないとするものである．著者が言うには，「どの教員の場合でも専らしていることはせいぜい，目の前に集う学生たちが指示された課題を学習したようであるか否かを日々確認する事であり，それでお終いである.」著者は更に言う．「わが国のカレジはどれ一つとして，完全な教授の場となっていない．上位のカレジの一つとして，自ら十分に為しうること ── つまり，教員たちの精神活動を学生たちの精神活動に直接かつ精力的に働きかけて，彼らに学ぶべきを学ぶことを（やり方しだいでさほど困難ではない）励まし，可能にし，強いること ── の半分も為していないのである.」当カレジの教授団は，常に最善の教授法を運良く採用してきたとも，またいかなる場合においても一時の怠りもなく全力を尽くしてきたとも，言わないであろう．にもかかわらず，前述のような主張 ── 教員たちが専らしていることはせいぜい，「目の前に集う学生たちが指示された課題を学習したようであるか否かを日々確認する事である」という主張 ── に対しては，彼らは無条件の否定を提起するであろう．実際，教員たちは最大の労を払いつつ，学生たちが授業に集まる時にだけでなく，時として，援助が必要な場合には学生個々人ごとに，あらゆる分野の熟知すべき諸原理の端々を説明し，身につけさせているのである．もしも教授団が，「教員たちの精神活動を学生たちの精神活動に直接かつ精力的に働きかけ」ることの意味を理解した上でなお，それに酷似した事態が当カレジには実在するとの彼らの確信を委員会に確約できないことがあれば，そうした教授団は自らに対しても，カレジに対しても責務を果たしていない，と自覚せざるをえないことになる．

[90]同じ著者はなおも問い続ける．「一体この国で誰が，この国で与えられた手段を通して，立派なギリシア語学者に育てられたであろうか．誰がラテン語の読み方，書き方，話し方を徹底的に教えられただろうか．否，後に自ら選んだ専門分野で，成功を修めるため基礎をもう一度やり直す必要もなく，栄達に向け安心して真直ぐに驀進できるような徹底した教育を，カレジで受けた者が一人でもいただろうか」．しかしわれわれは，当カレジの学生たちは，当カレジが彼らに知って欲しいと考える諸分野の，全ての内容を学んでいる，と主張しているのではない．学生たちも教員たちも，そうした達成が可能だと自ら主張する所からは，遥かに隔たっている．彼らはまた，こうした高みに昇りつめたとの素振りを正当にも見せた教授団を，国の内外で一度も見聞していないのである．確かに，殊に古典文学に関しては，他の環境の下であれば当然にも期待されるような条件が，全て整備されていない点は否定できない．にもかかわらず，われわれは以下については確信をもっている．カレジの課程の中の古典文学の分野は，主としてカレジ外に起源を有するあらゆる支障の直中であえぎつつも，着実に進歩しつつあること．毎年，数多くの学生たちが，ギリシア・ローマの古典の美しさを認め堪能しうるほどにそれらを熟知し，この分野で将来更に勉学を深める能力と気持ちとをもってカレジを卒業していること．更に，卒業する者全てが，彼らの古典の知識から，専門職での学習において，その他の仕事においても，多大な助けを得ていること，である．われわれの全ての分野で，当カレジの学生たちは，自らも適切な努力さえ怠らなければ（これは，仄聞する限り，どの国でも前提とされる条件である），「後に自ら選んだ専門分野で，成功を修めるため基礎をもう一度やり直す必要もなく，栄達に向け安心して真直ぐに驀進できるような」徹底した教育を，認められているような形で，「彼の学んだ専門分野において新たに彼の成功の基礎を築くことなく，直接かつ十分に活躍できる」ように徹底的に教育されており，この点を示すのに，一般的な評

判以上の証拠を持ち出すことはできない．こうした評判に訴えたいと思うのである．

[このレポートの前・後半部分は互いに独立に書かれたので，話題の中には双方で重複し考察されたものがある．これらテーマについては，かなり違った連関で導入された場合に限って，後半部でも取り上げられている．]

第三部 大学法人の委員会の報告書：イェィル・カレジ法人へ

[91]「当カレジでの通常の教育課程を変更して，当該の課程から死言語を除去して他の学習に替えることの適否について，また当カレジへの入学の一条件としてこれら死言語の十分な知識を要求すべきか，はたまたこれら言語の訓練については入学の後に学習を選択する者たちに限り提供すべきか，について検討する」ため任命された本委員会は，慎んで以下を報告する．

[92]本委員会に付託された問題が，見ての通りカレジの組織と法規との根本的な改変を期待し，また当カレジの設立の原目的からの徹底的な離脱を意味する点で極めて重大であり，また当カレジの利害関係と名声とに直接かかわることに鑑みて，本委員会はこの主題を当カレジの教授団に付託し，彼らがこの事柄に関する諸所見を，教育という職務でのその長年の経験と注意深い観察とから帰結するままに十分に闡明し，提起された改革に対する彼らの反論を証拠立てて論じるよう要請することが妥当であると看做すに到った．

[93]本委員会の欣快に絶えないことには，教授団は，ここに提出する文書において，全教育課程に関する包括的な見解に立脚し，教養教育の原理とともに，その原理を統制し実施するための根本方針を展開した．彼らは，古典文学が他の学問や諸科学との間に緊密な連関を有すること，また古典文学の予めの学習が，それら学問や諸科学の上達に便宜を与えることを，力強く示したのである．

[94]教授団が本主題を十分な力量をもって論じたことから，本委員会は高度な責任を免れている．

[95]ここに提出する文書が，企図された方策に関し決定を下す場合に比較考量し顧慮すべき事柄をすでに十全かつ立派に示しているので，本委員会はこの文書の提出をもって，託された責務を全うしたと考えることもできよう．にもかかわらず，件の方策の極めて重要である点からして，委員会としては，カレジの繁栄に致命的な影響を与える意図をもつと判断せざるをえないこの計画案に何ゆえ反対するか，その根拠を細大漏らさず手短に述べるための言い訳の余地は十分にあると期待するものである．

[96]ヨーロッパ大陸および島部に所在する諸大学では，どの専門職であれ相当な成功と名声とを達成するには，古典語の熟知がその重要な前提条件である，と例外なく看做されているようである．他方，古典語の無知は文芸面での優秀さを妨げる障碍であり，ほとんど克服不可能である，と看做されている．

[97]学ある人々の間では，この問題は疾うの昔に決着を見ており，後に続いた出来事や経験はそうした決着の正しさを立証している．更には，一般社会が古典文学へ与えている評価に照らしても，文明国においてもまた学問一般の間にあっても，古典文学が進展していることは十分に確定できるであろう．この点については，ヨーロッパでは卓越した学識者たちや高名な専門職者たちや政治家たちの間には，一致した意見と実践とが浸透しているように見える．また，わが国においても，同じような階級の間で意見が大きく食い違うことはないと，推定されるのである．

[98]確かに，革命の直前および最中のフランスにおいて，学識者向けの諸言語が軽視されたことは，認めざるをえない．

[99]しかし，そうした具体例は，文芸上あるいは道徳上のいずれの帰結からしても，われわれに模倣を求めることはできない．フランスでの軽視は，その国の文芸にどんな帰結を生じただろうか．確かに，分野によっては科学と技術とで極めて重大な進歩や発見が行われたし，鉱物および地質界は，疲れを知らぬ熱意と比類ない技量とによって掘り返され探究されたし，さらに戦争技術は驚くほど

完成されはしたが，しかしフランスの文芸上の名声は陰りを見せている．文学ではドイツが遥か先を行ってしまい，フランスの専門職者や政治家に対する悪影響が早くも取り沙汰されているのである．

[100]もしも，一部ヨーロッパでの啓蒙的な意見と定着した実践とを根拠に，他の部分での壊滅的な経験を目の前にしながらも，われわれが古典文学にたいし，教育課程において 二級の位置あるいは劣った地位を割り振るのみならず，現に提案されているごとく，古典語の知識が皆無の学生たちを入学，卒業さえさせるとしたなら，当カレジがこれまで保持してきた文芸上の高い評判は根本的に損われる，と予期されるのではないだろうか．実際，当カレジはおそらく遠からずして単なるアカデミーへと沈下し，その授与する学位はもはや偉大な文芸および科学上の学識達成の証拠ではなくなり，無価値化するであろう．ここでの学問水準が低下するのみでなく，われわれ自身が今日のわが国における文芸上の品格の下落のまごうかたなき共犯者となってしまうであろう．

[101]事態は正反対でなければならない．われわれこそ，自らの政治体制と諸制度の精神とが，他の国民の場合よりも特別な意味で，また一刻の猶予もなく，古典の学問分野を熱心かつ徹底的に探究し涵養して，その極めて豊かな諸作品を収集することを必要とする国民なのである．古典文学の提出する諸モデルは，年若い学生たちに手渡されるなら，必ずやその精神に自由の諸原理を吹き込むであろう．またそれらは，極めて生き生きとした愛国心を目覚めさせ，高貴で寛大な行動へとかき立てるのであって，かくしてアメリカの若者たちには格別に適合しているのである．古典古代の人々の品格を正当に理解するためには，彼らの残した古典を，原語を通して徹底的に研究し正確に識ることが不可欠である．これら古典文学の諸モデルに力強くかつ美しく表現された自由の清純な諸模範の素朴さ，活力，そして著しい特異点は，並みの翻訳，いや最も忠実な翻訳を通してさえも実感するのが難しいが，それは丁度生きて活動する知的な存在の暖かさ，躍動感，そして知的な輝きは，塑像という彫たくされた似姿からは実感し難いのと同じだからである．

[102]他の文明化された，キリスト教圏の諸国では，古典文学が益々どん欲に追い求められている以上，古典文学の価値と重要さとを貶めたり，その高度な学識に水を差すような傾向をもつ，わが国でのいかなる方策にも反対すべきであり，他方，公衆の大多数が教育に置く価値を高めるため，筋のとおったあらゆる努力を惜しんではならない．

[103]カレジ教育の価値を減ずることになれば，人々の間への知性の普及が妨げられる．知的および道徳的な価値の全国的な水準が低下するであろう．そして，最終的には自治の権利と特権とを行使する市民の能力が奪われることによって，われわれの市民的自由と宗教上の自由とは，窮地に立たされるだろう．

[104]かくして，今ここで考察中の方策は，至上な価値をもつわれわれの諸制度の構造と実はからみ合っていて，それらの耐久性を危うくしており，しかも，見ての通りこの方策は，これまで学問の一大重要部門と看做されてきたものを軽視して水を差す傾向をもち，かつ学識者や知恵者が長期にわたり堅固に打ち立ててきた意見や実践に背反することを意味するがゆえに，本委員会は，これら理由だけをもってしても，上記の方策の採用は極めて危険な実験であると公言する．

[105]しかしながら本委員会は，これまで示唆してきた諸考慮のみを根拠として，提起された計画に反対するのではない．カレジ入学前のみならず入学後にも，古典語，特にはラテン語とギリシア語を徹底的に学習することは，多くの観点からして，学生には決定的かつ実際的に役立つ，と本委員会は十分に納得している．若者の知的な陶冶において，これら言語の学習のもつ重要性を理詰めで否定することは出来ないし，経験の光に照らして判断する者たちの多くも，この点には殆ど疑問を差しはさまないであろう，と本委員会は考える．そうした学習は，若い学生を人類の精神的な格闘の歴史の最初期へと連れ戻して，精神の最も単純かつ原初的な働きを彼にあらわにし，そうした働きの輝かしくかつ無比の諸成果に精通させるので

ある．そうした学習は，学問という鉱脈はたゆまぬ努力によってのみ掘り進めうると実感させることによって，学生を精勤と厳格で誠実な勤勉へと励まして向かわせる一方で，天才であっても，深くかつ骨の折れる学問探究の助けなしには，無用者として破滅に到ることを学生に忠告するのである．かくして学生の記憶力は向上し，想起力はすばやくなり，批判的な識別力は一層正確となる．原初的な単純さを備えた言語から出発し，現在の有り様までその発展を辿ることによって，学生の嗜好は洗練され，思考する能力，思想を伝達する能力は必ず向上する結果となるのである．

[106]学生が古代の人々の古典から獲得する言語と神話の諸原理，および古代の年代記と地理上の知識とは，学生の心の中に当然にも知への熱い願望を沸き立たせ，他方，彼の想像力は古代の人々の詩心と雄弁とによって刺激される．古代の人々が賞賛する英雄たちの偉業は，実際に学生の大志をかき立てるかもしれないが，しかし彼らの格言に含まれる知恵は，学生の判断を啓発して指針を与え，彼の熱情をやわらげて，心中に葛藤を抱えながらも，流血を伴わない高い価値のトロフィーの獲得を目指し，科学の諸分野へと向かわせるかもしれないのである．最初期かつ最も輝かしい精神的な労作の宝庫にすでに足を踏み入れた学生は，古代の洗練された秘宝を手にしており，また，後の時代の天才的な知性たちの仕事を追跡した学生の精神には十分な知も蓄積されているので，彼は世界中の学識ある者たちと交流するに相応しいのみならず，同時に，それ以外の一般の人々にも役立つ者となっているのである．

[107]死言語は必要でないし，日常の交流や活動においては学者同士でさえ用いていないがゆえに，それら言語の獲得のために費やす時間は，あらゆる実際的な帰結から判断して浪費でしかない，とする主張がある．しかし，本委員会はこうした反対論に十分な根拠があるとは考えない．一体誰が，算術の学習が課する精神陶冶を手放すことに同意するであろうか，あるいは，ユークリッド幾何学のあれこれの問題および証明法における記号の完璧な配列が，実業家たちには直接かつ実際には役立たないからという理由で，学生にユークリッドを捨てるよう指導するであろうか．こうした課題練習は精神に活力を与え，周到で一貫した思考の習慣を生み出し，そして多方面にわたる学習から学生が獲得したであろう諸素材を，首尾良く用いるための準備をするのである．だが，古典文学の学習を不要とする諸理由は，見ての通り，学生には全く実用的な学問のみを与えるべきであるという，承認しがたい前提に立脚しているという点で，一層説得力に乏しいのである．

[108]基本的な教育の一部門としてのギリシア語の学習は，言語が歴史の初期に到達した完成度と，伝達の手段として数学の精確さに迫るその可能性とを，開示するのみでなく，同時に学生をして，知性の歴史において無比の成功を修め，時代が進歩しても依然として益々強い関心対象であり続けざるを得ない非凡で独自な人々に思いを馳せさせるとともに，その人々を熟知させるのである．たとえ他の理由はどうであれ，哲学の知識と言語の能力を培い，趣味や嗜好を洗練させる手段として，古典語は早い段階から誠実に，かつ忍耐強く学ばれるべきものなのである．

[109]しかしながら，学識を要する専門職にとっての古典文学の効用は，更に別な意味でも，それがカレジでの学習課程において顕著な位置を占める強力な理由を与える，と本委員会の意見は思料する．これまでもそうであったように，人並みはずれた精神的な資質を備えた弁護士であれば，古典文学の助けを受けずとも，高い尊敬を実際にかち得るのではあるが，しかし，当然のことにも，こうした人物は，学者であれば古典の学識から豊富に引用する含蓄に富んだ具体例や麗句を自在に操る力が，自分にはないことを嘆くのが常である．弁護士や政治家には不可欠な，人間の品格についての透徹しかつ深い知識についても，あらゆる時代での人間の行為の原動力を探究し明らかにすることを通して，最も効率的に獲得される．こうして導入された多様な比較作業によって，どの弁護士や政治家，裁判官にも必須な資質，すなわち穏健で目の肥えた判断力が，実務的な意味で身につくのではないとしても，大幅に進歩するのである．

知恵のこの上なく貴重なこうした特質は，人間や物事に関する，行き当たりばったりで皮相な見解により形成することはできない．法律家ないし政治家として名を成そうとする者は，歴史の全展開を古代の古典にまで登りつめ，しかも原語を用いることによって人間や物事について熱心に，深く，入念に，かつ詳細に学習し，探究し，探査すべきでなのである．

[110]医術と外科術での高度な技能と広範な有用性にとって，ラテン語・ギリシア語の知識が重要である点については，これら技術が今日のように発展した段階においても，その言語の大きな部分が，依然として古代に起源を発することを想起するとき，否定することは不可能である．

[111]古典文学なしには，聖職者たちは，途方もない責任と無限の重さとを担う専門職にあって，深刻な困惑を経験することになろう．古代の言語が啓示宗教を人間に伝達する道具となっていたことから，こうした原典こそ正確さと真実との基準であり，同時に，無知ないしは意図的なわい曲による誤訳が実にしばしば引き起こした困難や疑念を説明し，取り除くための，安全な唯一の拠り所であると看做さざるをえないのである．

[112]こうした深遠な関心を呼ぶ事柄について，真理を確証するために入手可能な手段を，何であれ顧みない傾向をもつ教師など考えらるだろうか．永遠の諸関心を巻き込む論争が，聖書の批判的検討によってしばしば決着をみるごとく，人間の魂へ忠実であろうとすれば，聖書をその原初的な単純さと純粋さとにおいて読み，理解することが絶対的な義務として課されるのである．

[113]実際のところ，この論点をこれ以上敷衍する必要はありえない．というのも，聖職という専門職にあって，古代の学問と，神の真理のことばを説明する最も信頼のおける手段とに関する無知は，あまねく嘆かれねばならいからである．とすれば，もしわれわれが，教会の教父たちや保護者たちの前例と意図とに従って，真理をその単純さ，美しさ，力強さにおいて識り，伝達したいと願うならば，古代の言語はカレジにおいては一層集中的な学習の対象となり，更に強力に保護されることになるであろう．神による真理が古代の言語により人間に伝達されたという一事だけを考えても，件の問いには終止符を打ち，これら言語には永久に保証された地位を与えるべきである．加えて，古典文学は，実例と解釈との極めて豊富な源への道を開く一方で，それに熟達した人物には，義務の完遂を実に効果的に可能としてくれるのである．

[114]もしも古代の言語の学習がもはやカレジ入学の前提条件，ないしカレジの正規の学習課程の一部ではなくなれば，学生は自身の母語ないし近代諸言語の獲得に時間を費やせる，との意見が表明されてきている．しかしながら，英語は古代の言語と実に緊密な関係を有し，そこから直接に派生し，またそれらに基礎をおき合成されているので，英語を徹底的に理解するには，これら古代の言語の学習は不可欠なのである．実際のところ，古代の言語は大部分の近代諸言語の基礎と看做しうるであろう．

[115]仕事ないし科学研究のため将来海外を訪れる学生たち，また文芸上の優れた教養を期待する者たちの場合，汎用性の高い近代諸言語を学ぶべきである点について，本委員会は進んでこれを承認したい．しかし，一般的な使用を目的とする近代諸言語を獲得する一番迅速な方法は，それら近代言語の派生源である古代の言語に精通することである．

[116]ラテン語の理解力があれば，フランス語の学習者の進捗が目立って促進されることは，一般に認められている．したがって本委員会としては，学生が古代の古典に十分な進歩を遂げているであろうカレジ上級生の時期にフランス語を学ばせるのであれば，確立された勉学のシステムを混乱させることもなく，他方平行課程としては大きな利点を有するであろうので，十分に納得している．しかしながら本委員会の判断では，入学の条件，正規の学習課程，はたまた学識の基準のいずれにおいても，フランス語でさえ古典語に取って替わるべきではない．本委員会はフランス語課程を，古典語の課程と同等とは看做さないのである．スペイン語もイタリア語もラテン語に堪能な者には

極めて容易に習得されるので，これら言語はラテン語の従属語であると看做して十分に妥当であり，ラテン語が教えられているカレジの体系的な学習課程に取り込む必要はない，と本委員会は考える．スペイン語やイタリア語をラテン語に優先させるなど，問題外である．学生たちの選択に応じフランス語およびスペイン語の学習を許可する現行の規程は賢明かつ妥当と看做しうるし，学生たちが近代諸言語の学習の希望を表明する場合には，古典語に適度な進捗のある限り，誰に対しても適当に便宜をはかり続けるべきである，と本委員会は考える．

[117]付託された主題に関して，何ぶんにも致し方なくそそくさとした見解の感は免れないが，本委員会は以上，簡潔に言及してきた諸考察から判断し，当カレジが正規の教育課程を変更して古代の言語を排除することは得策でない，と結論するに到った．

[118]本委員会は，古代の言語を徹底的に学習し，正確な知識を得ることの重要性を十分に納得し，また古代の言語の有用性に関わる多大な誤解は，それら言語が中途半端にしか学習・習得されて来たに過ぎないという事実から生じたことを確信して，当カレジで過去 25 年間にこれら言語への注目度が高まってきたこと，また当カレジへの入学条件に課される古典その他の学識がかなり高度化してきたことに対し，賛同の念をもって理解を示したい．こうした引き上げの結果として，当カレジの品格と，その学問水準とは，まごうかたなく向上してきている．カレジ入学に向けた学業準備の期間が延長され，その帰結として，応募者の平均年齢が上昇したため，学生たちは知性の成熟が求められる学習に対し，これまで以上に首尾良く従事し，更に高度な学問および科学と取り組むことが可能となったのである．

[119]本委員会は，これまで当カレジが辿って来た道程を強く肯首するし，入学条件が徐々に引き上げられ，その条件の一つとして究極的には，特に古典について，現行の規程に定めるよりは遥かに高度の学識を必要とすることが，至極妥当であるとの意見を抱いている．しかしながら本員会は，この点に関する教授団からの知見および経験が聴取され，彼らから具体的な勧告を受け取るまでは，理事会がこの主題について行動を起こすことは賢明でないと，考えるものである．

（イェイル・カレジ，1828 年 9 月 9 日）